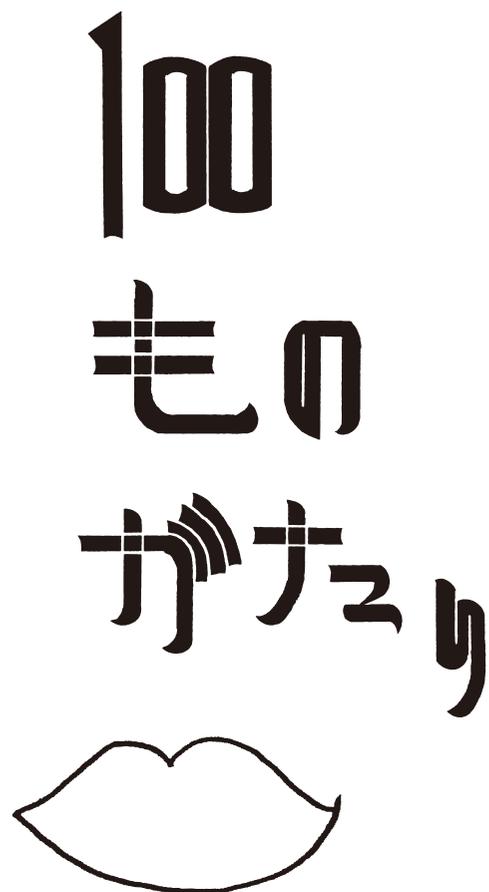


三瀬夏之介ディレクション 山のような100ものがたり

ガイドブック



山のような100ものがたり

あなたの思う「山形らしさ」とはどのようなものでしょうか？

美味しい食材？ 山伏文化？ 観光地山寺のイメージ？ 盆地が形作る気候風土？

「山のような100ものがたり」では多くの方々に「山形らしさ」と認識されているモチーフの内、これまであまり意識されてこなかった部分にフォーカスをし、民俗・博物資料や芸工大から生まれるアート作品、地域の遺産などが入り乱れる展覧会です。

典型的な「地域アート」として山形らしさを固定し増幅させるのではなく、また山形を最後の桃源郷として称揚させることもなく、研究者たちが見つけ出した現実の風景の奥底にある真実と、ここ東北に住むアーティストたちがそれに触発され直感的につかみ出した「山のようなものがたり」が広がり「山形の新たな見え方」を探る空間で、あなたの住む場所に思いを巡らしてもらおうことを願っています。

芸工大の敷地内を「ラボラトリー」「インキュベーション」「コンテンポラリー」「コラボレーション」「アーツ&クラフツ」の5つのゾーンに分け、そこに100個の作品が散りばめられます。

このガイドブックを片手に「あなたの100のものがたり」を見つけて出してください。

〈山のような100ものぐたり一覧〉

- | | | | | | | | |
|----|--------------|----|---------------|----|----------------|-----|-------------------|
| 1 | 杉の下意匠室 + 中島彩 | 26 | 吉賀伸 | 51 | 原高史 + 今村直樹 | 76 | 都築潤 |
| 2 | 井戸博章 | 27 | 新海竹太郎 | 52 | 東北画は可能か? | 77 | 武居功一郎 |
| 3 | 風神雷神像 | 28 | 新海竹蔵 | 53 | 石原葉 + ゲッコウパレード | 78 | 武田鉄平 |
| 4 | 大山龍顕 | 29 | 井戸博章 | 54 | 東北画は可能か? | 79 | 堀田知聖 |
| 5 | ムカサリ絵馬 | 30 | 金子朋樹 | 55 | 金子拓 | 80 | 渋谷七奈 |
| 6 | ハタユキコ | 31 | 新海竹蔵 | 56 | 鴻崎正武 | 81 | 永岡大輔 |
| 7 | 狩野宏明 | 32 | 新海覚雄 | 57 | 金子富之 | 82 | ヤタイ祭り実行委員会 |
| 8 | 御沢仏 | 33 | 近岡善次郎 | 58 | 長沢明 | 83 | OF THE BOX(追沼翼) |
| 9 | 坂本大三郎 | 34 | 屋代敏博 | 59 | LLP アメフラシ | 84 | 山形キャラ調査班 |
| 10 | 鴻崎正武 | 35 | 菊池新学 | 60 | 番場三雄 | 85 | アトリ工棟出入口 |
| 11 | 佐藤恒平 | 36 | 東北文化研究センター | 61 | 金子朋樹 | 86 | 木の橋 |
| 12 | 大槌秀樹 | 37 | 藤原泰佑 | 62 | 春原直人 | 87 | 工芸棟に向かう道中 |
| 13 | 深井聡一郎 | 38 | 文化財保存修復研究センター | 63 | 大山龍顕 | 88 | AGAIN-ST×L PACK. |
| 14 | 山形鑄物 | 39 | 高橋源吉 | 64 | 吉賀伸 | 89 | 山の上の陶器市 |
| 15 | 吾妻兼治郎 | 40 | 武谷大介 | 65 | ハタユキコ | 90 | 工芸棟 |
| 16 | 坂田啓一郎 | 41 | 藤原泰佑 | 66 | 青山ひろゆき | 91 | 道端の足跡 |
| 17 | 新海竹太郎 | 42 | 高橋由一 | 67 | 久松知子 | 92 | 小川のほとりのお地藏さん |
| 18 | 深井聡一郎 | 43 | 後藤拓朗 | 68 | 渋谷剛史 | 93 | 見晴らしのいい丘 |
| 19 | 三瀬夏之介 | 44 | 清水大典 | 69 | 村上滋郎 | 94 | 妖精のようなオブジェ |
| 20 | 旧佐藤仏像コレクション | 45 | 五百澤智也 | 70 | ジャンゴ | 95 | 伝統館 |
| 21 | 新海竹太郎 | 46 | 浅野友理子 | 71 | 水野健一郎 | 96 | 鏡池 |
| 22 | 鈴木慎吾 | 47 | 是恒さくら | 72 | とんぼせんせい | 97 | ご神木 |
| 23 | 保田井智之 | 48 | 大山龍顕 | 73 | 高木真希人 | 98 | 山形と芸工大展 |
| 24 | 新海竹太郎 | 49 | 金子富之 | 74 | よしまるシン | 99 | 山形エクセレントデザイン展2018 |
| 25 | 深井聡一郎 | 50 | 学生会館 | 75 | 奥田栄希 | 100 | 将軍塚 |

〈会場MAP〉

インフォメーション

1 **i**

本館 1F

ラボラトリーゾーン
研究から生まれるアート

2-48

本館 7F THE TOP

49

本館 1F THE WALL

50

学生会館 1F

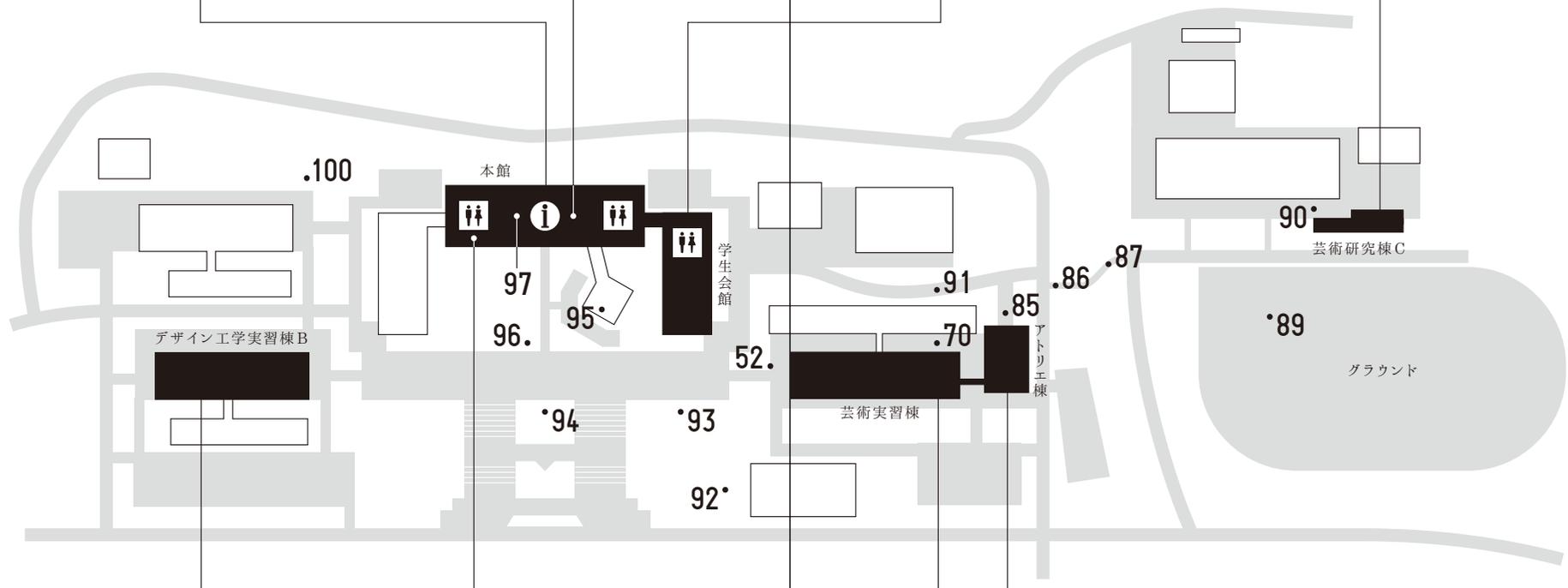
51

学生会館 2F THE CUBE

アーツ&クラフツゾーン
生活とアート

88

芸術研究棟 C



デザイン工学実習棟B

本館

学生会館

芸術研究棟C

グラウンド

芸術実習棟

アトリエ棟

山形エクセレントデザイン展2018

99

デザイン工学実習棟B 2F

山形と芸工大展

98

本館 1F TUAD WINDOW

インキュベーションゾーン
芸工大から生まれるアート

53-69

芸術実習棟 1F

コンテンポラリーゾーン
未来から生まれるアート

71-81

アトリエ棟 1F

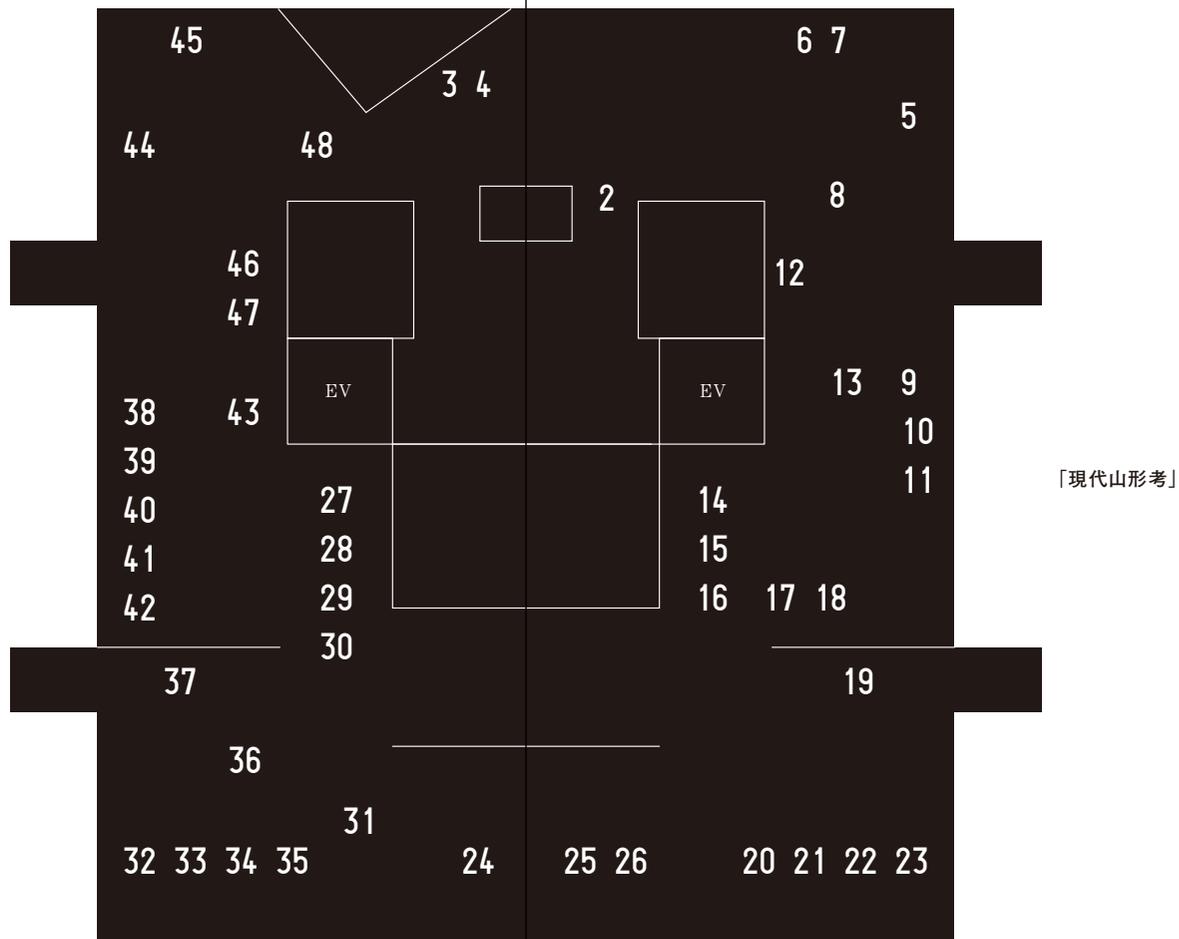
コラボレーションゾーン
協働から生まれるアート

82-84

アトリエ棟 3F

2-48

本館7F



53 - 69

芸術実習棟1F

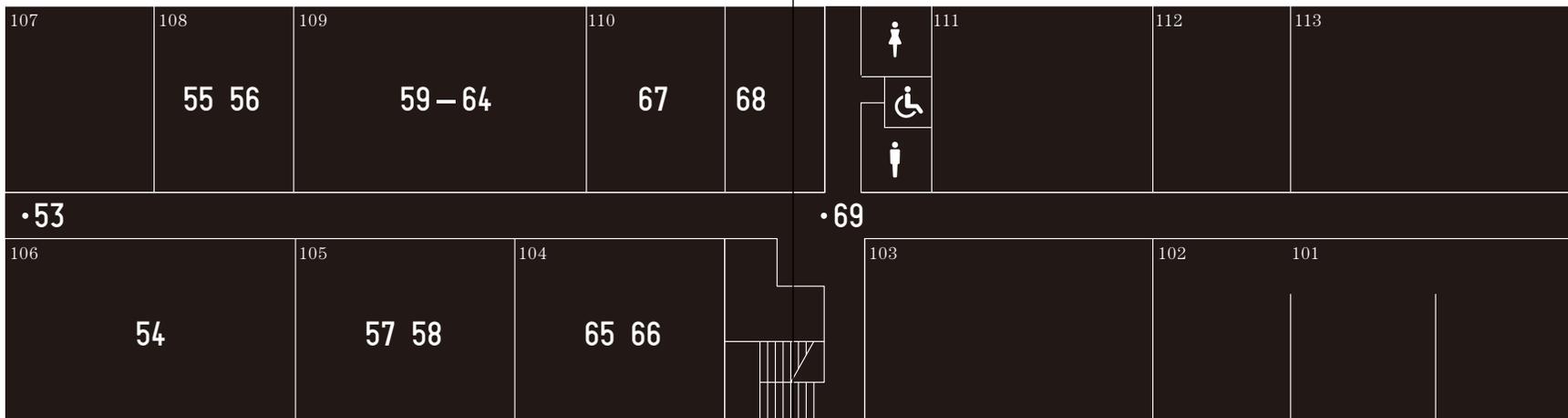
「山のなか、森の気配」

「やまはかたる」

「物語らない歴史画」

「山を背負い投げ」

「山に入って思うこと」



「山逢行脚録」

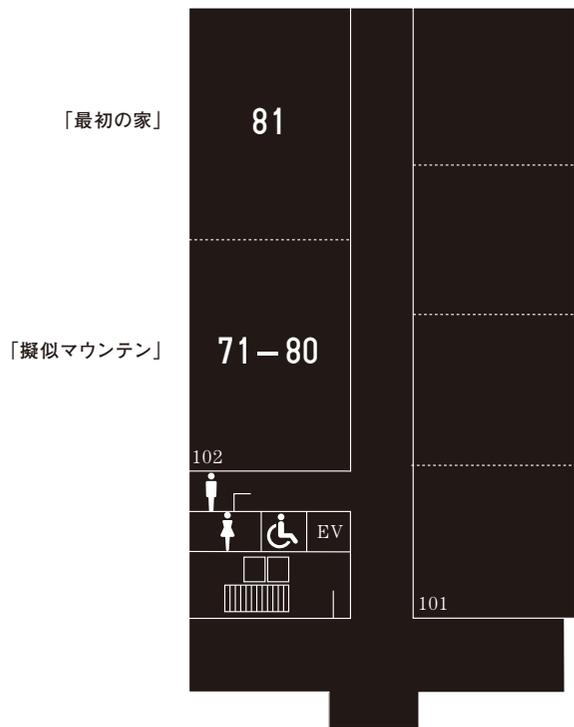
「幻成する狂気」

「ニユ〜サクラダの湯」

コンテンポラリーゾーン | 未来から生まれるアート

71-81

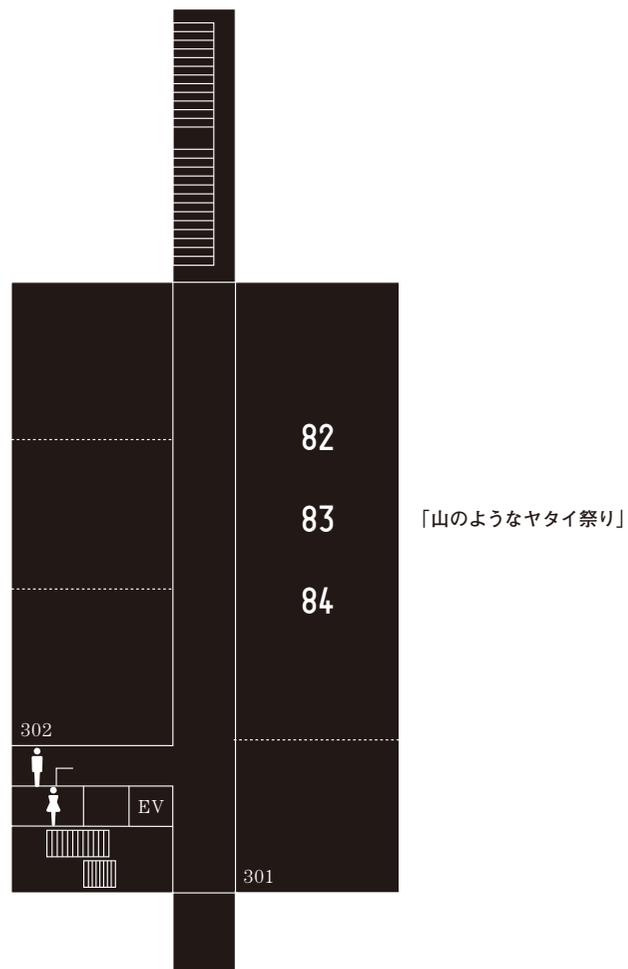
アトリエ棟 1F



コラボレーションゾーン | 協働から生まれるアート

82-84

アトリエ棟 3F





ようこそ、1000ものがたりへ

山形市の外れの大きな杉の古木、開山杉の下に事務所を構える「杉の下意匠室」。そこそこのペタランデザイナーふたりが出身地である山形で、もう一度デザインを考え直すべく2017年に設立した。2016年に山形へ移住した編集者・ライターの中島彩。東京と山形とを行き来している。当初は慣れない雪に苦戦しながらも山の景色と温泉と仲間たちにすっぽり包まれ、いまではここが第二の故郷に。そんな3人がデザインと編集を担当する『1000ものがたり』のガイドブック。展示作品の邪魔をしないよう、出しゃばらないよう、ニュートラルに。それぞれ個性的な1000個のものがたりに、1000点のイラストを添えてまとめた。



ミクストメディア
2018年
作家蔵

作品にとつての生死とは如何に

岐阜の田舎で育ち、現在は彫刻をしながら文化財修復をしている。山形との関係は突然の一本の電話から始まった。全く予想外なことが起きると、縁があるのかもしれないと思ってしまう。それ以来「山形で、古いもの、新しいもの、あらゆるものを」残し伝える」とはなんだろうと、ずっと考え生きている。

作品の寿命はあるのだろうか？ 収蔵され保存が続けば永遠に生きているのか。誰の眼に触れる機会がなくても生きているのか……。美術にとつての「死」は明確ではない。もしかしたら安楽死だってあるかもしれない。何のために作られ、何のために残されるのか。今作は作品にとつての生死についてを考え研究したものである。

作品にとつての生死とは如何に



地域を見守る、火の神と水の神

大江町にある無人集落の急坂を登ると「雷神社」という石碑と鳥居が現れる。その先の山門をくぐり、倒れた鳥居を過ぎると本堂が見えてくる。その中にペアで安置されているのが我々。挨拶が遅れたが、我が名を風神雷神像と申す。緑色の風神は水の神、赤色の雷神は火の神として、地域で信仰されてきた。かつて我々の前にかけてあった青亭^{あおぞ}の御戸帳は町指定文化財として歴史民俗資料館に収蔵されている。

神社の本堂に我々が祀られるのは珍しいことのようにだ。一般的に風神雷神は単独の信仰対象ではなく、二十八部衆とセットか寺院山門の左右に安置されることが多いからだ。明治初年の神仏分離によって本堂の仏像が撤去され、元は山門にいた我々が本堂に移された。そんな推測もされているようだ。



木造、一木造、金属製眼、表面彩色仕上げ
江戸時代後期
大江町雷神社



せめてあの世で結婚を

ムカサリとは、婚礼を意味する山形県村山地方の方言です。ムカサリ絵馬は未婚で亡くなった人の供養のため、近親者が婚礼の様子を描き奉納する絵馬であり、せめて死後の世界で結婚を：という近親者からの思いを感じます。村山地方に集中しており、明治後期以降のものが現存します。三三九度男女が同じ酒を飲み交わす儀式を描くものが最も多く、初期にはたくさんの人物が描かれるも簡略化が進み、新郎新婦のみを描くものが主流に。近年では洋装の結婚式や写真を合成したものの、県外からの奉納もあります。上山市久昌寺の堂内入口では、壁一面にぎっしりとムカサリ絵馬が奉られています。すべて檀家から奉納されたもので、地域と密接に結びついた習俗だったとうかがえます。

紙本着色など

1902年(明治35年)～1970年代頃

上山市 久昌寺

消滅の危機に潜む魅力

都内のベッドタウンで育ち、大学では日本画を勉強した。日本絵画の構造を知るために文化財保存に進み、恩師と仕事がしたくて山形へ。調査のため山形のいろいろな寺院へ出かけるなか、大江町にある「中の畑雷神社」の「風神雷神像」と出会った。

「風神雷神像」は山形で最も衝撃を受けた作品のひとつで、その存在に触発され、光背(仏像の後ろにつける、光明をかたどった装飾)をイメージに屏風を制作した。「風神雷神」は日本画でも琳派の屏風で広く知られている。今作は琳派に「風神雷神像」の独創的な素朴さを加えた、ある種オマージュのような作品だ。多くの文化財や地域が喪失の危機にあるいまだからこそ、その魅力を知ってほしい。



木材、和紙、岩絵具、膠(にかわ)、墨、金箔、銀箔

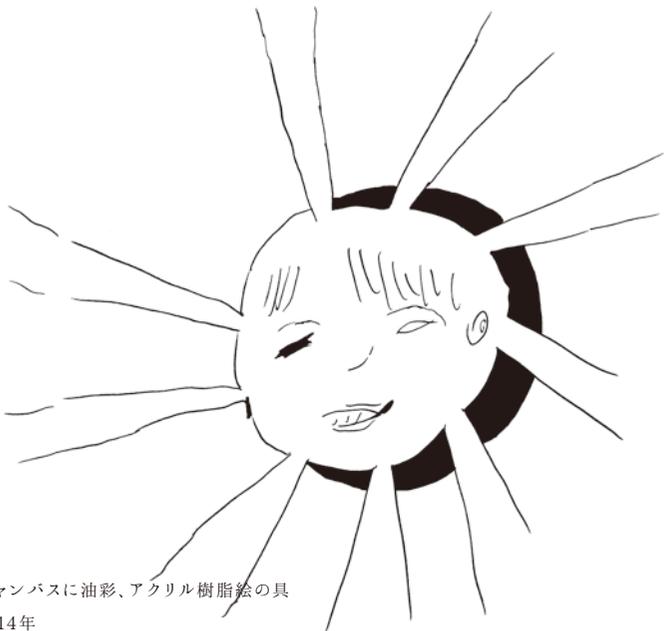
2018年

作家蔵

不必要なまでに明るい色で

仙台のニュータウンで育ち、大学から6年間を山形で過ごしました。今は仙台の実家で油絵を描いています。世界では日々さまざまな事件や出来事が起こり、それと同時に自分の日常は淡々と過ぎていく。そんなどうしようもない現実や、今生きている時代の空気を描き遺したいと思っています。笑えないような世の中だからこそ、思わずクスッと笑ってしまうユーモアを込めて、不必要なまでに明るい色で。

本作を制作する直前に祖父が亡くなり、その前年に姉が嫁ぎ、共に暮らす家族が減ることに恐怖を感じました。しかし別れがあるから出会いがある。すべては循環している。そう思うようになり、現代日本の循環をムカサリ絵馬で描きました。



キャンバスに油彩、アクリル樹脂絵の具
2014年
作家蔵



人とモノの結びつきと「描く」「つくる」「営みを描く」
高校まで過ごした山形では、自然の中で生きてきた。大学院まで過ごしたつくばでは、ひたすらアトリエにこもり絵を描いた。2年間滞在したフィレンツェでは、イタリア語で報道される震災の映像を見た。現在は奈良で絵画と教育について考え行動する日々。父が幼少期に拾った打製石器や、母の地元のイカ釣り漁船の電球、山形出身の画家であり私の作品の最も辛辣な批評家でもある妻など、山形の人やモノとの繋がりが現在の自己を作り上げている。
《M》と名付けた今作では、ムカサリ絵馬と絵馬堂のイメージを出発点としている。人間とモノが結びついて生きるサイボーグとしての姿や、「ホモ・ファベル(工作する人)」としての「描く」「作る」営みそのものを描いた。

油彩、写真転写、コラージュ、金箔、白亜下地、綿布、パネル
2018年
作家蔵

古い道を辿る

千葉県出身です。20代の頃は東京で漫画家のアシスタントをしたりイラストを描いたりして、30歳の時に山伏の文化に足を踏み入れました。本を出して以来、文筆業やイラストの仕事、作品作りなどを行っています。山間部に残る生活技術を学びたくて、山形に住むようになりました。じつは寒さが苦手です。

出羽三山の文化は複雑でひとことで語ることはできませんが、古い道を辿る体験を映像にすることで、観るものと山に残る文化をつなげたいと思います。



映像、ペイント

2018年

作家蔵

自然物から偶像へ

白鷹町塩田行屋から来ました、御沢仏と申します。出羽三山のひとつ、湯殿山の信仰にまつわる神仏群であります。我々はもともと岩や洞窟などの自然物でした。というのも、湯殿山参りでは御神体に続く沢を登り降りする「御沢駆け」があり、その途中にある特徴的な岩や洞窟などの自然物に神仏の名前が付けられ、まとめて御沢仏と呼んでいたのです。のちには彫刻・絵画化された偶像も作られ、同じく御沢仏と呼ばれました。安置・参拝することで、湯殿山参りと同じ功德があるとされたようです。我々を制作したのは、山形市十日町の仏師・新海宗慶（1846～1899）で、息子も制作を手伝っていました。その息子が、のちに近代彫刻の大家となる新海竹太郎（1868～1927）なのです。



御沢仏

御沢仏像

木造、一木造、玉眼、表面彩色仕上げ／表面漆箔仕上げ

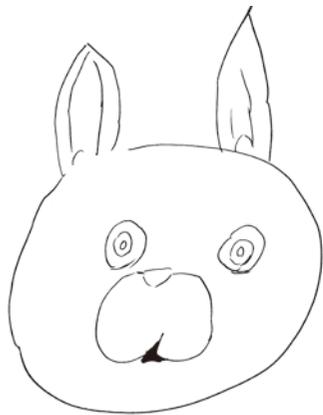
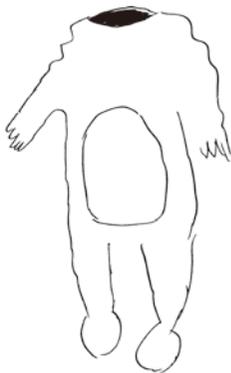
1879年(明治12年)

白鷹町 塩田行屋

これは現代の御沢仏なのか

中学まで人口25000人ほどの福島県奥会津の地で過ごし、なかなか周囲と馴染めない自分にコンプレックスを抱いていた。東北芸術工科大学への進学で山形へ。大学院の卒業時に作った「当地キャラクターをきっかけに朝日町で会社を立ち上げ、地域振興の研究者として実験的な町おこしをしている。田舎に馴染めなかった過去の自分を救いたい。そんな叶わぬ願いが、町おこしの原動力となっている。

環境の特徴を外観に反映した「御沢仏」のように、外観に地域の特徴を盛り込んだ山形県内の「当地キャラたち」。その誕生の年度や、制作までの流れをヒアリングし、地域とキャラたちの「今」を記録する。



ミクストメディア

2018年

作家蔵

アシスタント=大久保明香、高瀬快



うけたもう、語るなかれ

福島で18年、東京で18年を過ごし、山形にたどり着いて10年目。東北の自然や文化に惹かれ、和紙や金箔、岩絵具、油絵具を使い、なにか奇妙ないきものが住む絵を描いている。山形を訪れ驚いたのは、ひとつひとつの集落に魅力的な差異があり、誇り高い文化が守られていること。どこも実際に訪れないと解らない神秘の魅力に溢れていた。

湯殿山の修験者が沢を駆け上がる修行の際に目にする岩や洞窟を信仰対象とし、偶像化した御沢仏。今作のテーマを「秘境」とし、写真家・民俗学者である内藤正敏氏が撮影した御沢仏を作品に取り入れ、自身の絵画テーマとの融合をはかった。

パネル、麻紙、岩絵具、アクリル、箔

2013年

作家蔵



湯殿山への想いを込めて

東京の美大で彫刻を学び、2011年から本学に就いた。山形は山籠りと世界を繋ぐ、思念する場だ。新しい工芸と彫刻の領域をつくるために、この土地でゼミ生達と日々研究をしている。

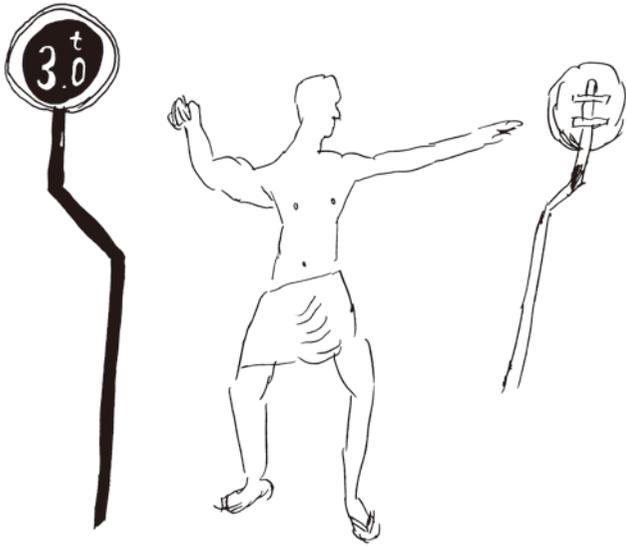
白鷹町の文化交流センター「あゆむ」で見た御沢仏は、湯殿山の御神体を彫刻化していることに衝撃を受けた。今作は御神体の仏像化である「御秘密八大金剛童子像」を、御神体から取れる「おあか」(鉄・販売品)を用いて制作している。湯殿山の御神体のフォルムがあまりに好きで、年に2、3度は見に行っている。過去の展示では出し切れなかった湯殿山への想いを込めていきたい。

陶
2018年
作家蔵

廃村へ遊びに行く

千葉県の海辺で育ち、外で遊ぶのが好きだった。いつからか物作りに興味を持ち、作品制作に足を踏み入れる。気づいたら物作りからそこに至る行為や過程を楽しみ、遊び始める。遊びを通して見えてくることは多く、今はその記録を収集している。山形に来て驚いたのは、自然の色彩の鮮やかさ(偽物かと最初は思った)と、積った雪の丸さ(絵などで見ると丸みを帯びた雪は本当だった)。よくある地方都市のリアルな縮図が見えて面白い。

山形に数多くある消滅した集落や廃村。そこは現代から取り残され、追いやられた場なのか。それとも自然へ戻ろうとする自己治癒なのか。既存の神格化された過程をもとに、遊びに出かける。

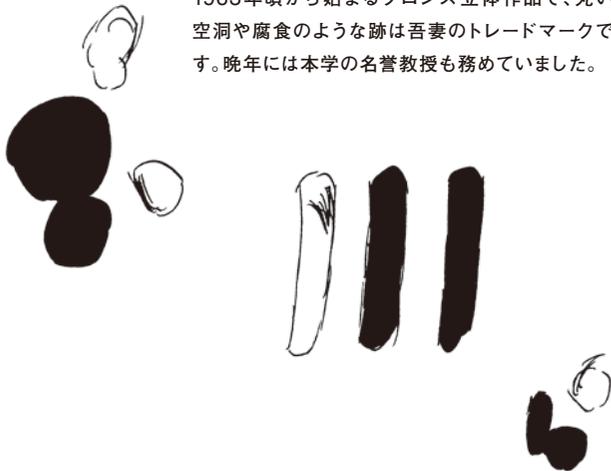


HDビデオ、記録写真
2018年
作家蔵

ふとした瞬間、突破口が開いた

吾妻兼治郎(1926~2016)は山形市出身の彫刻家。銅町の代々青銅鑄造業を営む吾妻家に生まれ、幼い頃から工房が遊び場でした。戦後に彫刻家を志して東京芸術大学に入学。1956年にミラノに渡り、イタリア現代彫刻の巨匠マリノ・マリーニに師事しました。

その後、吾妻はしばらくマリーニの作風から抜け出せず悩んでいました。そんなある日、アトリエの床にストーブ用木片がリズミカルに散らばりました。そこに美しさを感じた吾妻は、そのまま石膏をかけたレリーフを制作しました。これが後の《MU》(無)シリーズ誕生のきっかけとなります。本作は1963年頃から始まるブロンズ立体作品で、丸い空洞や腐食のような跡は吾妻のトレードマークです。晩年には本学の名誉教授も務めていました。



ブロンズ
1973年
山形美術館

伝統の技が生んだ大仏

山形市の鑄物業の起源は平安時代と言われています。江戸時代には最上義光が商工業の発達のため城下町を大きく再編し、馬見ヶ崎川の北側に銅町を置きました。初期は釜などの日用品や仏像、江戸中期から梵鐘や燈籠、明治時代には鉄瓶や茶の湯釜などの美術工芸品が作られるようになりました。現在は銅町と西部工業団地(別名:鑄物町)の2カ所で生産されています。1975年には茶釜や鉄瓶などの生活工芸品が「山形鑄物」として国の伝統的工芸品指定を受けました。2018年、東京都日の出町宝光寺に鹿野大仏が誕生しました。その大きさは約12m。鑄造を担当したのは西部工業団地の鈴木鑄造所です。鎌倉の大仏を超えた東日本最大級の大仏坐像として全国から注目を集めています。



鉄瓶
鉄、漆
現代
山形市 長文堂



本質は石膏像にあり

はじめまして、ヒンドゥー教の神である私シヴァと妻のパールヴァティーです。私たちが制作したのは、彫刻家の新海竹太郎（1868～1927）です。新海氏は山形市十日町に生まれ、家業である仏師修業の後に上京して西洋彫刻を学び、日本を代表する彫刻家となりました。ちなみに今年で生誕150周年なんですよ。

実は私たちはブロンズ像をつくるための石膏像です。作家の直接的な痕跡は石膏像にあるので重要性は高いながらも、あくまで主役はブロンズ像。石膏像が残されるのは珍しいことです。ところが2014年に山形市の西村工場铸造部で奇跡的に発見していただきました。新海氏の大作の石膏原型はほとんど残っておらず、とても貴重な発見だと言われています。

石膏着色（石膏原型）

1915年（大正4年）

山形美術館保管



目には見えないカタチ

実家のある大阪から、山形の小国町にある山奥の全寮制高校に入りました。その後、新設された芸工大の一期生として彫刻を学び、そのまま現在にいたるまで、もはや人生の大部分を山形で過ごしています。木彫と鑄造を専門としています。

仏像を原型に使ったブロンズの鑄造作品たち。宗教的な意味を持たせるつもりはなく、目に見えない部分をカタチにしたいと思っています。例えば、仏像は誰が見ても仏像だと分かりますが、その内側や周りの空間のカタチは、普段は目に見えないモノです。自分でも把握できないカタチが生まれる楽しさを感じながら制作しました。

ブロンズ鑄造、木

2015年、2015年、2018年

作家蔵



故郷奈良と繋がる小盆地宇宙

生まれ育ったのは奈良県。ずっと何もないダサイ場所だと思っていたけど、今は新旧が入り混じるエキサイティングな場所だと思っている。大学赴任と共に山形へ移り住んだ。震災がなければ数年で関西に戻っていたかもしれない。震災以降に多くの宿題が露出したここは、デザイン・アートの先端の現場だと思う。まだもう少し住み続けるだろうな。

本作品をよく見ると原寸大の奈良の大仏の顔(眼の長さ1m2cm)が描かれている。ずっとかっこ悪いと思っていた奈良に鎮座し続ける大仏。その存在に救われる時が来るなんて思いもしなかった。宗教心の死んでしまった現代において、信じること、信仰と生きることの間を関係を考えるために描いた。

和紙、墨、アクリル、金属粉

2017年

作家蔵

型を作品化し、自身のトラウマに挑む

彫刻でよく使われる素材に「テラコッタ」がある。日本にも歴史的に「陶」があるのに、そのイタリア語を使うことに抵抗があった。そんなことを訴えていたら、いつの間にか陶芸の教員として山形へ呼ばれていた。

彫刻の世界において、石膏の前は陶製の型が一般的だった。型は、たい焼き型¹の形状であり、メソポタミヤやインダスで、神像などの彫像を大量生産するために用いられたものだ。今回は型そのものを作品化し、本来作品化される、型から抜き取られた複製品²は台座となる。私はこれまで型の使用を避け、陶による彫刻作品を選んできた。型自体を作品化することで、自身のトラウマに挑みたいと考えている。



陶、ミクストメディア

2018年

作家蔵

奈良や平安、インドの要素も盛り込んで

山形美術館から来ました、聖観音像です。私が生まれた経緯をお話しましょう。大正14年に神奈川県総持寺に大きさ約10mの《大観音菩薩銅像》が建立されました。像と台座の考案と建造は建築家の伊東忠太が、像の原型制作は新海竹太郎(1868～1927)が担当しました。その後その縮小版の像が、総持寺管主から久邇宮良子(後の昭和天皇皇后)に献上されました。それをさらに伊東氏の希望で複製したものが私。どちらも新海氏が制作しました。つまり大観音像も私もほぼ同じ形なわけですね。

新海氏は、理想の観音像を求めて私を制作しました。少年時代に学んだ江戸～明治初期の仏像の造形にとどまらず、奈良～平安の観音像の優秀作やインドの仏像の要素が取り入れられています。



ブロンズ

1925年(大正14年)

山形美術館

また日の目を見ることができました

私たち阿弥陀如来立像、毘沙門天立像、観音菩薩坐像は、かつて出羽三山に祀られていました。出羽三山は古代から修験道の聖地として栄え、神と仏が共に祀られていたのですが、明治新政府の神仏分離によって三山は神の山とされ、多くの仏像が流出・破棄されてしまいました。

そんな私たちを救ってくれたのが、酒田市の佐藤泰太良さんです。自宅の土蔵に安置した後、1974年には曾孫の佐藤完司さんが約2500体を鶴岡市出羽三山神社に奉納しました。そして「旧佐藤仏像コレクション」として出羽三山歴史博物館に展示され、2017年には祀るための「千仏堂」が建立されました。明治初期に山から追われた私たちが、再び信仰の対象として神社の一角に移していただけたのです。



阿弥陀如来立像、毘沙門天立像、観音菩薩坐像

木造、一木造、彫眼、表面漆箔仕上げ

平安時代後期(12世紀)、平安時代後期(12世紀)、朝鮮時代(16世紀)

鶴岡市 出羽三山神社



地域の記憶と想いを次世代につなぐ

福島県郡山市出身。ラジコン、自転車、プラモデルのスクラップ&ビルドに私財を投入し、庭に壮大(?)な前方後円墳をつくって親に叱られ、紙粘土で奈良の大仏の再現に挑んで挫折する少年時代を経て、芸工大に一期生として入学、文化財修復と出会う。日々技術を磨きつつ、地域の記憶、人々の想いが込められた形あるものを次世代に繋いでいきたいと思っている。

山形は自然が豊富で、人としての営みを改めて教えてくれる。失ってしまったものが確かにまだあると思わせてくれる場所だ。さらに山形には森羅万象あらゆるものに神仏が宿っている。そんな世界観の表現を試みたものが本作品である。

ヒノキ材、楠材、布、皮革、漆、顔料

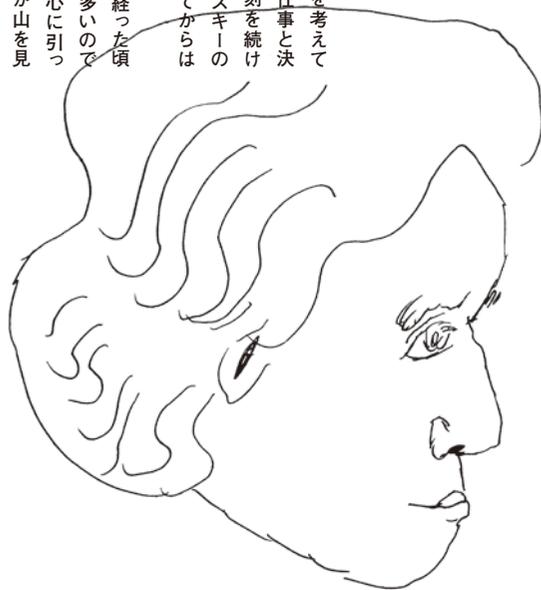
2018年

個人蔵

山を見ながら海を見る

高校生の頃は将来の仕事に海洋物理か弁護士を考えていましたが、定年問題を考慮して彫刻を生涯の仕事と決めました。その後は紆余曲折ありながらも、彫刻を続けています。山形には新幹線が開通する以前からスキーのため蔵王を訪れていました。本学に勤めはじめてからは毎週山形に通っています。

今回出展する作品は、山形に通い始めて数年が経った頃のもので、海を原風景として制作することが多いのですが、大学から眺める月山が印象深く、どこか心に引っかかり制作を進めたことを覚えています。なぜか山を見ながらも、海を想起させるのです。



木、ブロンズ

2006年

作家蔵

新海竹太郎と対峙して

東京の美大で彫刻を学び、東日本大震災の2日前に山形に就くことが決まった。美術を語ることが憚られる風潮のなか、こんなときこそ、この大学から世界と繋がる作家を輩出すべきだと感じ、新しいタイプの陶芸家を輩出してきた。

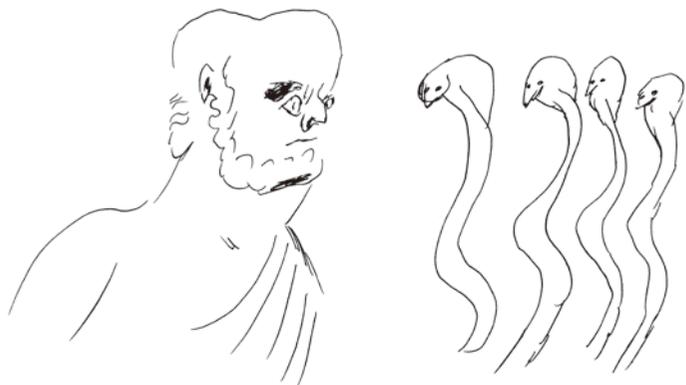
「動物考」のシリーズは、過去の動物彫刻と対峙して自分なりの像を模索する試みだ。今回のライオンは、山形市生まれの彫刻家・新海竹太郎のレリーフと対峙する作品である。彼の甥である新海竹蔵の狛犬も出品されているため、狛犬のルーツに繋がるバビロニアのレリーフを彫刻化した。レリーフは絵画から派生したもので、彫刻でないという持論から、裏側も想像して彫り出し彫刻作品とした。



陶
2018年
作家蔵

彫刻の新しいアプローチに挑む

彫刻家の新海竹太郎（1868〜1927）は、出世作《北白川宮能久親王銅像》の原型制作を終え、改めて西洋彫刻を勉強するため明治33年にフランスとドイツに渡ります。帰国後はレリーフ作品を多く制作するようになりました。きっかけはフランスでレリーフの施されたメダル作品を多く見たこと。さらに少年期の仏師修業時代に制作した仏壇の浮彫が、彫刻の新しいアプローチに繋がったのかもしれない。絵画と比べて周りの状況を表すのが困難な彫刻に物語性を与えるため、レリーフが有効だと新海は考えたのでしよう。《羅漢》もレリーフ作品の一つです。インド人らしき羅漢が何匹ものコブラと対峙しています。具体的にはわからないものの、仏教説話のよような物語を感じさせる作品です。



ブロンズ
1908年(明治41年)
山形美術館

ありのままの社会を形つくる

新海竹太郎(1868~1927)の代表作《ゆあみ》は天平時代風の髪型に八頭身の西洋的身体の女性像で、「和洋折衷の造形性」としばしば評価されていますが、和洋折衷ということだけに目を向けると見落とすことも多そうです。新海が明治44年から始めた「浮世彫刻」もまた、和洋折衷の取り組みといえるかもしれません。浮世彫刻とは浮世絵の彫刻版で、靴磨きや相撲の稽古といった当時の日本の社会風俗を西洋的な彫刻手法で作ったもの。

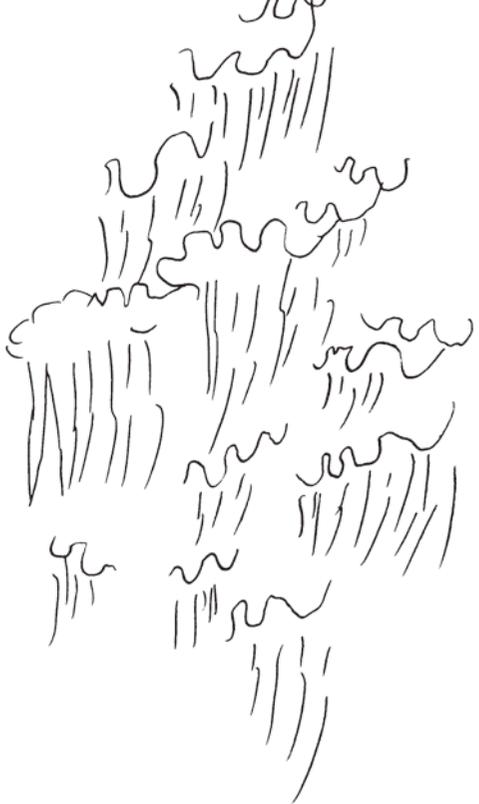
本作も浮世彫刻に連なる作品で、三味線を傍らに敷物を肩に掛けて寒さをしのぐ女と、寒そうに口元で手を温める女の子が表れています。新海が街の片隅で見たであろう旅芸人の光景が、エキゾチシズムに走ることなく、自然な眼差しで表現されています。



石膏(石膏原型)
1917年(大正6年)
山形美術館保管

永遠に落下し続ける時間

出身は山口県萩市。萩焼の窯元に生まれた。山形に来たのは9年前で、その理由は2つ。当時東京で地域活性の活動をしていて、ローカルの美術の在り方に関心があったから。もうひとつは、「ここ山形に松下村塾の魂が受け継がれていることを知ったから。萩は三方が山で一方が海。ここは四方が山。気候も風土もまったく違うが、自然との距離感はとても似ている。創作の源泉が豊富で興味が尽きない。本作品の制作にあたり参照したのは、酒田市の玉簾の氷瀑、あるいは鍾乳石。永遠に落下し続ける時間の可視化である。その中にネアンデルタール人を潜ませた。我々はかつての隣人であり、絶滅にまで追いやった彼らのDNAを数パーセント宿しているのだという。



陶
2018年
作家蔵

大正3年に第一次世界大戦が勃発して、日本はドイツが領有していたミクロネシア地域を占領しました。政府はこの地域の民族に関する知識を得るため、人類学調査を実施しました。本作はこの調査で撮影されたヤップ島住民の写真を参照して、新海竹蔵(1897〜1968)が制作したものです。竹蔵は山形市出身で、伯父に新海竹太郎を持つ彫刻家です。少年時代は家業の仏師修業をして、後に竹太郎に師事しました。本作は文部省美術展覧会に初入選したデビュー作で、竹蔵は人類学調査で得られた最新の学術知識を即座に反映して制作しました。上半身が裸の母が子供を抱えています。現在は母の頭部が失われています。出展時の写真から、制作当初の姿を知ることができます。

人類学調査から生まれた母と子



石膏着色

1915年(大正4年)

山形大学附属博物館



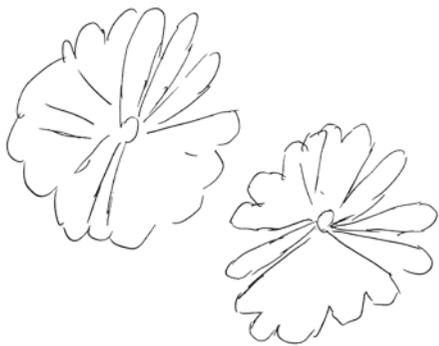
あり得たかもしれない彫刻史

岐阜の田舎育ちで、幼少期は近くの神社でよく遊び、次第にものづくりが好きになった。現在は彫刻をしながら文化財修復をしている。日本美術史をひとつの大きな「山」とするならば、その中で彫刻の歴史は実は少ない。日本の近代彫刻作家の先駆けが生まれたこの山形で、もう一度原点から彫刻を考え、少しでもその山を大きくしたいと考えている。もし新しい神像を作るとしたら、宗教の概念を外した「神」そのものを現代に表したい。西洋美術が宗教から自由化したように、日本美術も自由化したと言えるだろうか。もし美術の制度を政府主導で展開しなかったとしたら。今作「混濁」では、あり得たかもしれない彫刻史を考察し制作した。

木

2018年

作家蔵



豊穰と豊饒の地、創造の磁場

2015年より芸工大の日本画の教員として山形へ。もともと親族が岩手や宮城に住んでいたため、東北地域は遠い存在ではなかった。現在は、僕の出身地であり、家族の住む静岡県御殿場市と山形を往来する生活をおくっている。山形は、豊穰と豊饒の地であり、創造の磁場だと感じている。ここ山形と御殿場で、絵画表現を通して現代の社会や地域、風土を見つめている。

異国文化から言葉、信仰、そして着衣をも生活の中に吸収し、脈々と受け継がれてきたものと等価に扱い、また統合してきた自国の姿。今回、山形でも馴染みが深く、世界でさまざまな意味を持つ「菊」を主題に、折衷について考えてみた。

日本画技法、杉板、顔料、染料、墨、箔、泥

2018年

作家蔵

兄さんは靖国神社にいます

山形市の山形県護国神社には特徴的なデザインのパグ犬がいます。昭和10年に新海竹蔵(1897〜1968)によって制作されました。そのパグ犬には、父親と兄がいます。父は大正5年にできた新潟県弥彦神社のパグ犬で、建築家の伊東忠太がデザインを、竹蔵の叔父・竹太郎が原型制作を担当しました。兄は昭和8年に伊東と竹蔵が組んで作った靖国神社のパグ犬。それが流行して、二人とは無関係に各地で似た像が作られました。靖国神社と山形県護国神社のパグ犬の制作者は同じ竹蔵ですが、まっすぐに正面を向く靖国神社のパグ犬とは違い、護国神社のパグ犬は首をひねっています。今回展示しているのは、山形県護国神社のパグ犬の姿を縮小してブロンズ像にしたものです。

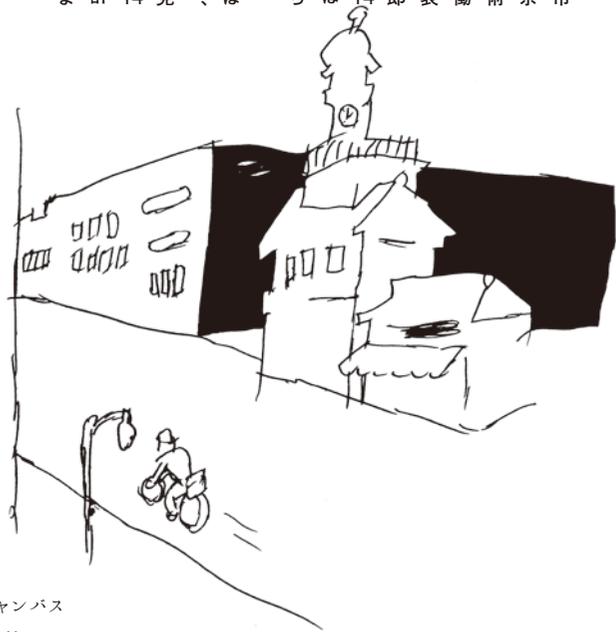


ブロンズ

山形市

新海覚雄(1904~1968)は、山形市出身の彫刻家・新海竹太郎の長男として東京で生まれました。戦後にはリアリズムの美術運動を主導。ダイナミックな群像表現で労働運動などを描き、当時の国民文化運動を代表する社会派の画家となりました。父・竹太郎の故郷である山形との繋がりも強く、昭和14年には山形物産紹介所で個展を開催するほか、山形県総合美術展の第1回には山形から出品しています。

本作品は、竹太郎の生家がある十日町からほど近い七日町大通りの日常を描いたもので、いつもの社会派とは少し違った表情が垣間見えます。中央に描かれる蜂屋時計店は明治14年に創業した東北有数の時計店で、その時計塔は七日町のランドマークとして昭和45年まで活躍しました。



油彩、キャンパス
山形美術館

社会派の画家が見せる素顔

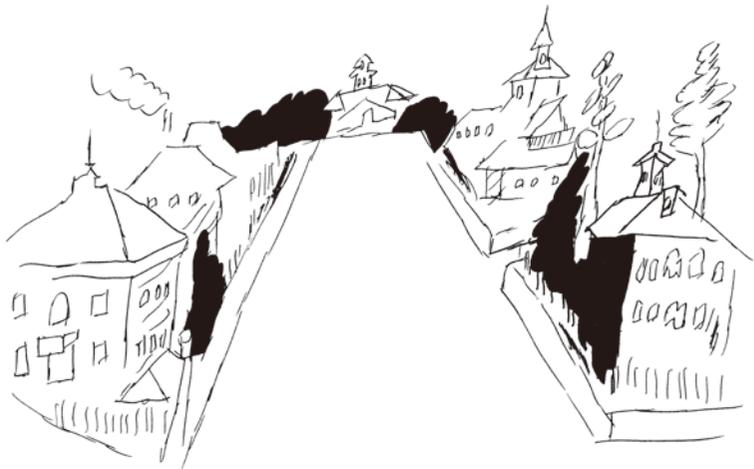


近代洋風建築に恋して

近岡善次郎(1914~2007)は山形県新庄市に生まれ、旧制新庄中学校卒業後、東京の文化学院にて洋画を学びました。1943年頃からは全国に残る建造物を取材した明治の西洋館シリーズを描き始め、切手のシリーズにも採用されるなど文化的な業績として高い評価を受けました。

その興味の原点は、故郷の町に建つ赤レンガの西洋館でした。本作で描かれる旧山形市立病院済生館本館も山形を代表する擬洋風建築であり、山形市の欧化計画の一環として建てられたものです。1966年には重要文化財となり霞城公園内に移築されました。キャンパスには市街中心部に建っていたあの頃の姿が、街を歩き交う人々の活気と共に描かれています。

油彩、キャンパス
1984年
山形美術館



明治のまちづくりを記録する

天童市に生まれ、江戸で写真術を学び、明治元年には山形市七日町で東北初の写真館を開業した写真師の菊池新学（1832～1915）。山形県初代県令の三島通庸（1835～1888）が、公共施設の建設や山形市街の都市整備、東北の道路開発などを一気に押し進めた当時、三島が自らの業績を記録するため「御用写真師」として任命した人物です。明治天皇の東北巡幸の際には、菊池が撮影した写真が展示・献上されました。

菊池の写真は絵画にも活用されています。三島が画家の高橋由一（1828～1894）に依頼した《山形市街図》や《酢川にかかる常磐橋》などの作品は、菊池の写真をもとに同じ構図で描かれ、『三島県令道路改修記念画帖』にも収録されました。

山形県写真帖（複製）

写真

元資料1876～1880年頃

天童市立旧東村山郡役所資料館

明治から、現在の山形、そして日本へ

高校で写真を始め、大学で映像と演劇を学ぶ。20～30代はアイルランド、オーストリア、フランス、チェコなど欧米諸国のアーティスト・イン・レジデンスで制作発表していた。人と関わることが好きで、参加型プロジェクトや美術教育にも力を注いでいる。芸工大に赴任して10年が過ぎた。くつろぎながら集中できるこのパワースポット山形で、これからも活動を続けていく。

初代県令の三島通庸はなぜ菊池新学に写真を撮影させて、高橋由一に絵画を描かせたのだろうか。それは芸術だけでなく、権力を誇示する側面もあったのだろう。彼らの残した風景から出発し、現在の山形の風景を分析し、日本の風景を見つめ直す。



インスタレーション、写真

2018年

作家蔵

協力=バナソニック株式会社 アプライアンス社 Game Changer Catapult AMPプロジェクト



この一枚が歴史を刻む
 本学の東北文化研究センターでは、2002年から近代の写真の絵はがきを収集しはじめ、現在約2万6千点を所蔵しています。収集の対象範囲は、日本全土、韓国、北朝鮮、中国、台湾などの外国にも及びます。絵はがきの中には、社寺、観光地、着物姿の人々、当時の災害状況などの光景を見ることができ、さらに歴史学、民俗学、人類学といった視点では、近代の生活や文化を理解する手がかりともなります。

山形県内の絵はがきには、山寺の名所を写したものが多くあり、古いものは山形市の写真師・照井正太郎によって撮影されています。洋画家・高橋源吉(1828~1894)が明治44年に山寺の風景画を制作した際は、こうした写真やそこから制作された絵はがきや書籍図版を参照しました。

山形県内の絵はがきなど
 紙、印刷
 明治時代末期~昭和時代
 東北芸術工科大学



建物や看板が残す事実

出身は群馬県の前橋市。現在は山形県の大江町で生活しています。山形市は、山形都市圏として発展を続けると同時に、最上川による舟運文化、出羽三山を中心とする山岳信仰や、東北道から外れた立地や保守的な地域性、政財界の影響もあり、県外とは異なる独特の文化、風土が現在でも根強く残っています。

今後、東北中央道が全通して県外との関わりが大きく変化していく中、山形市の街中の建物や看板は、私たちが変化の真っ只中にいたという事実を残してくれます。今、街のこの瞬間を描き、見つめなおすことは、記録を残す側面とともに、この街の未来に対して私たち自身が一種の区切りをつけるきっかけになると思うのです。

和紙、アクリル、顔料、箔
 2018年
 作家蔵

博物館や美術館にあるものだけが文化財ではありません。寺院に遺る仏像、神社に伝わる獅子舞、町に点在する蔵、雛人形など、実は暮らし中にも文化財は多く存在しています。そして今、地域社会が主体となって持続的に保存・活用する体制がますます求められています。

文化財保存修復研究センターは、文化財の保存修復や調査や研究を行う「文化財の病院」として、2001年本学に設立されました。保存修復の知識と技術を大学教育に還元しながら情報発信を行い、山形を中心に東北各地の文化財を護る中核を担っています。現在は、鶴岡市善宝寺の木造五百羅漢像や山形市旧山寺ホテルの高橋源吉《最上川(本合海)》の修復など、多くのプロジェクトに取り組んでいます。

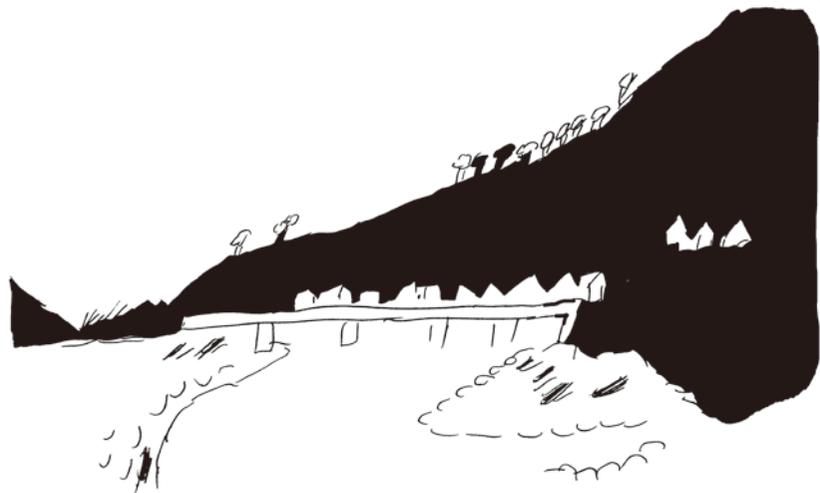


高橋源吉《最上川(本合海)》関係資料
1911年(明治44年)
山形市 旧山寺ホテル

舞台は山寺。明治時代の地域アート

山寺が全国的に有名な観光地となったのは、明治時代末のこと。さらに盛り上げようと、明治44年には山寺の名所の風景画などを並べた「山寺油絵展覧会」が、立石寺根本中堂にて開催されました。

油絵の制作者は、洋画家の高橋源吉(1858〜1913)。源吉といえば、父親は日本初の本格的洋画家といわれる高橋由一(1828〜1894)で、父親からの指導や工部美術学校で日本最先端の洋画教育を受け、明治時代前半には洋画界の中心で活躍しました。晩年の放浪生活では山形にも訪れ、その際に「山寺油絵展覧会」のために山寺や最上川の風景や動物を描きました。そのなかで《天華岩》《山寺全景》《立谷川 対面石》《最上川(本合海)》《とら》は現存しています。



《山寺全景》《立谷川 対面石》《とら》
油彩、キャンパス
1911年(明治44年)
将棋むら天童タワー、天童市立荒谷小学校



忠実に、並列に、土地の要素を描き出す

出身は群馬県の前橋市。大学入学と同時に山形へ。山形は東北の土着的な風土を現在に残す地域であり、県内のいろいろな所を巡ってきました。現在は山形県の大江町で生活しています。

この絵に映っているモチーフは、すべて山寺周辺に現実にある、もしくは過去に存在していたものばかりです。山寺の信仰、修練、また観光地としての役割、さまざまな要因が複雑に絡み合いながらこの土地の歴史は刻まれ、風土が形成されてきました。かつてここにあったもの、今日目の前にある景色、山寺を形作る物事を忠実に、並列に描くこと。それがこの土地の現在の姿を描き、記録することに対し、私が尊重するべきことのように思うのです。

パネルに和紙、アクリル、顔料、箔

2017年

個人蔵

山梨県生まれ。神奈川県育ち。ニューヨークの美大卒。カナダ・トロント在住。アーティスト、キュレーター、コレクター、アート教育者、コミュニティ代弁者。主には油彩画を描いています。ちょっと恥ずかしい話ですが、山形には元彼女がいて当時はしげしげと通っていました。(二股をかけられて)振られてしまったのですが、大好きな場所がたくさんでいたので、(彼女なしでも)しげしげと通いたい場所です。近い将来に県内の温泉地を制覇したいです。

本作では、山寺の山々とその上に広がる広大な風景を描きました。自然の偉大さの前に人類の営みは小さく、儂い。山寺の長い歴史と風土へのリスペクトを表現しています。



キャンバスに油彩

2018年

作家蔵



山形の開発を忠実に描く

明治17年、山形県初代県令の三島通庸(1835~1888)は、自らが成し遂げた山形、福島、栃木の道路開発事業を記録するため、高橋由一(1828~1894)に画帖制作を依頼しました。由一は日本初の本格的な洋画家であり、三島からの依頼で明治14年にも山形を訪れ《山形市街図》などを描いています。

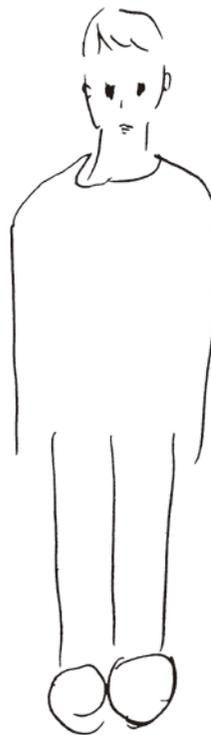
画帖制作では、約4か月の東北取材のうち半分を山形に費やし、新道を写生して回りました。その下図をもとに、息子の源吉(1858~1913)と石版印刷所「玄々堂」の画工が描き起こし、翌18年に『三島県令道路改修記念画帖』全3巻(50部)が出版されました。全128図のうち55図が山形県の図であり、当時の山形の土木事業の規模の大きさがうかがえます。

『三島県令道路改修記念画帖』其之三山形県之巻

絹本、石版印刷、淡彩

1885年(明治18年)

山形大学附属博物館



ふつうの美術家

馬見ヶ崎川と千歳山に挟まれた団地で生まれ、近所の駄菓子屋さんでメンコを買って遊んだり、鑑別所の隣の公園で友人たちと野球やケイドロに興じたり、木登りして置いてけぼりにされたり、女の子に泣かされたり、消火器をぶちまけて逃げ帰ったり、人前でケツを出しすぎて親を深刻に悩ませたり、好きな女の子が間抜けなチャライ先輩と付き合っているのを知って呪いながら悶絶したり、男だけ的高校で羽生くんみたいな可愛すぎる同級生がいて遠巻きに観察したりして、最近はい山形でいろんな出自の人が楽しそうにやっているのを横目に、消え去っていく廃村や廃道がたくさんあるのを知って遊びに行ったりして、ふつうに過ごしている。

ミクストメディア

2018年

作家蔵

虫でも草でもなく、キノコです

冬虫夏草とは、セミやハチなどの昆虫に寄生するキノコのこと。冬期は虫の中で栄養分を吸収して、春には虫から菌が発芽、夏には細長い棒状に成長します。植物学者・清水大典(1915~1998)は、冬虫夏草研究の第一人者です。埼玉県秩父市に生まれ、ほぼ独学で広範囲な博物学を修得して都内の研究施設に勤めたのち、夫人の地元・山形県米沢市へ移住しました。山形には最上川や奥羽山脈など冬虫夏草が好む豊かな自然環境が残っています。標本作りにおいて、冬虫夏草は採集したその瞬間から変色が始まってしまうので、スケッチで採集時の状態を緻密に描き出しました。鮮やかな色彩や微毛の一本、胞子のひとつも逃さず写しとるその技術は、まさに超絶技巧といえます。

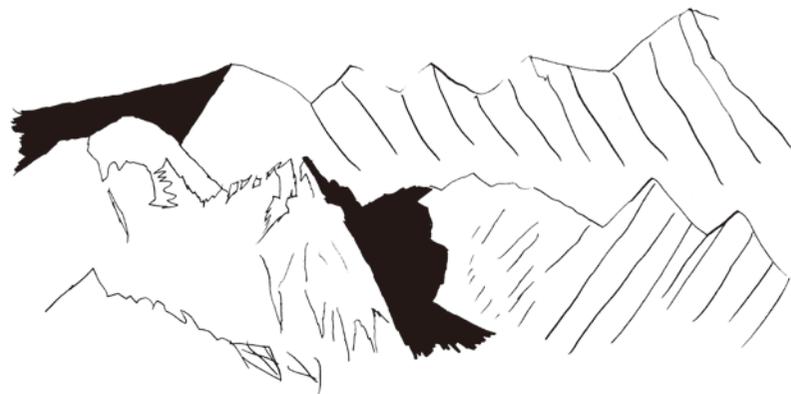


水彩、ペン、紙
米沢市上杉博物館

山を学び、愛した人生

山形市出身の山岳地形学者・五百澤智也(1933~2013)は、幼少期から山に関心を持ち、蔵王山、愛宕山などをスケッチしていました。東京教育大学で地理学を専攻し、1957年からは国土地理院にて、空中写真を利用した先駆的な地図制作に取り組みました。退職後は山形市に移住して、山岳鳥瞰図作家、著述家、日本の氷河地形の研究者として業績を残しています。

五百澤が描く鳥瞰図には、その山が刻んできた数万年の時間が圧倒的な密度で表現されています。氷河の拡大・縮小で刻まれた山地斜面の断面形状や、最大傾斜方向に沿った落水線など、地形学的に重要な線を精密に書き込んでいるのです。山形の風景画も多数描き、故郷へのあたたかい眼差しも感じられます。



笹谷峠鳥瞰
ペン、水彩、紙
2008年復刻(元資料1981年)
山形大学附属博物館



受け継がれる食文化
宮城県の多賀城市で生まれ、海辺の景色に慣れ親しんで育ちました。大学から山形へ。山の食文化に興味を持ちはじめ、山間部を訪れるようになりました。訪れるたびに、現地の人たちの日常が生々しく飛び込んできました。現在は、様々な土地での出会いが作品を作る原動力となっています。

山形には身近な植物を上手に活用する人々の知恵が息づいています。たとえば冬を越すための保存食はどれも下処理に時間も手間も要するので、次の世代に受け継がれることが難しくなっています。そんな自然とともに生きる人々を描いています。

パネルに石膏地、油彩、水干絵の具、岩絵の具

2018年

作家蔵

その土地の物語を見つめて

広島で生まれ育ち、アラスカ州立大学を卒業し、2015年に山形へ移住。アラスカ先住民の神話と山形県の民話に似たものを感じて、そんな物語が育まれた風土と人の暮らしに興味を持っていた。その後3年間山形で暮らし、県内各地に残る手仕事、海・森・畑の仕事、季節ごとの風景の変化、信仰のかたちと出会ったことで、物語の背景がくっきりと見えてきた。その土地の物語を作品にすることを、どこにいても続けていきたい。

本作は、山形県最上郡戸沢村に暮らす韓国出身の「外国人花嫁」の女性たちへのインタビューをもとにしている。異国から山形へたどり着いた人たちの視点から、現在の山形を見つめ直せたらと思う。



布、紙、糸

2018年

作家蔵

制作活動の場、機、人、モチーフに恵まれて

埼玉県出身。東北に惹かれ、芸工大へ入学。山形は東北の精神風土から幻成、幻影を得て、なにかを追求できる土地。限界集落にある今の住まいでは、あるお寺のご縁により制作活動ができる環境となった。住居も山形自体もそこで学ぶいろいろなことに納得し、「もうこれでよし」と思わぬ限りは、自分のエゴで去ってはいけなと感じている。「怖畏金剛」の源流は、ヒンドウのシヴァ神である。宇宙での生死の移り変わりを示す火炎輪の中で、躍動感あふれる舞踏を展開する。それはシヴァの存在そのもののリズムである。ちなみに、山形の蔵王でも「蔵王大黒天」というシヴァ系の神が信仰されている。



岩絵具、アクリル、透明水彩、ペン、箔、吉祥麻紙

2014年

蟹仙洞

喪失から再生への道標

東京・八王子のベッドタウンで育った。大学で日本画を勉強したが、掛軸や屏風を活かした作品を作るために根本を知ろうと文化財修復の道へ。大学院を卒業後に恩師の技術を盗みに山形へ。文化財保存修復センターで研究員を引き継ぎ、地域に残る掛軸や古文書などを修復して、身近な文化財を守り伝えている。山形を彩ってきた紅花と青苧。青苧とは苧麻の別名で、古くから植物繊維をとるために栽培されてきた。どちらも近代化にともなって姿を減らしてきたもので、山や川という交易路と人との繋がりの変遷を象徴している。二つの色彩を象徴した作品を通じて、喪失から再生へ続く道標としたい。

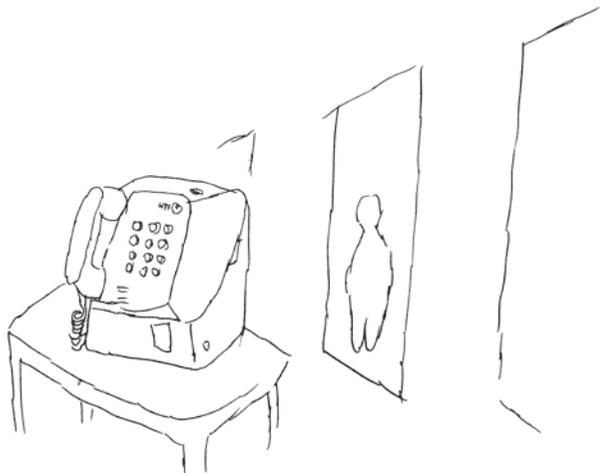


「紅い柱」=木材、アクリル板、染料、金箔、岩絵具、膠

「蒼い柱」=木製パネル、青苧和紙、岩絵具、金箔、膠、墨

2018年

作家蔵



食堂のカイダン

とある日のこと。学食の入口で鏡のようなものに映る“人”の姿を見た。一瞬のことではっきりとは分からない。ただ、この日を境に奇妙な体験をするようになった。一週間が経ち、あの日から避けていた学食に足を運ぶと、電話のベルが聞こえてきた。周りを見渡すと一台の黒電話がある。他の人には聞こえていないようだ。気付けば受話器を握っていた。「もしもし?」「…キ…テ…エレ…ベーター…二…」子どもの声だ。何かに引き寄せられるように奥に向かった。すると、ちょうどエレベーターが到着し、扉が開いた。その瞬間、「ヨカッ…タ…」小さな手が腕を掴んできた。その後の記憶はない。意識が戻ったときは大学の裏山にいた。どうやら三日間行方不明だったらしい。一種の“神隠し”にあったのだろうか。あの子どもは一体…。

テキスト=100ものがたり調査班

土地固有の文化から生まれたアート

国内外のビエンナーレでインスタレーションや絵画などを発表する現代美術家の原高史と、企業CMの企画演出のほか、映像で地域の魅力を伝える映像ディレクターの今村直樹による、山形ビエンナーレ版特別プロジェクトです。

雪深く、長く、厳しい冬があるからこそ、豊かな農や食やモノづくりが育まれた山形。この地で私たち教員は、学生や地域の人たちと共に取り組みを続けています。白鷹町に伝わる養蚕・染色織物・和紙の技や食文化を次世代につなげる活動や、山形から量の明日を考える活動など、プロジェクトの成果を「人」をテーマに展示します。



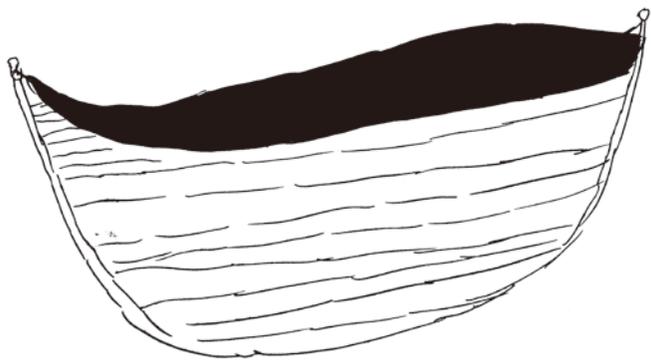
写真、映像、ミクストメディア

2018～2019年

未来へ向けて乗せていくもの、置いていくもの

首都圏からは遠く離れた東北地域における、美術の可能性を考えるプロジェクト。2009年に三瀬夏之介と鴻崎正武により東北芸術工科大学で結成された。学科やコースに縛られず、多様な学生、卒業生、作家たちが集う「広場」のような場所である。

震災直前に、気仙沼のリアスアーク美術館での発表のために「方舟」を題材として共同制作を構想していた。「さあ、描くぞ!」といった3月11日にあの地震が起き、その後一気に描き上げたのが本作品である。未来へ向けて乗せていくもの、置いていくものをディスカッションしながら、余震の中での制作だった。



東北画は可能か? — 方舟計画

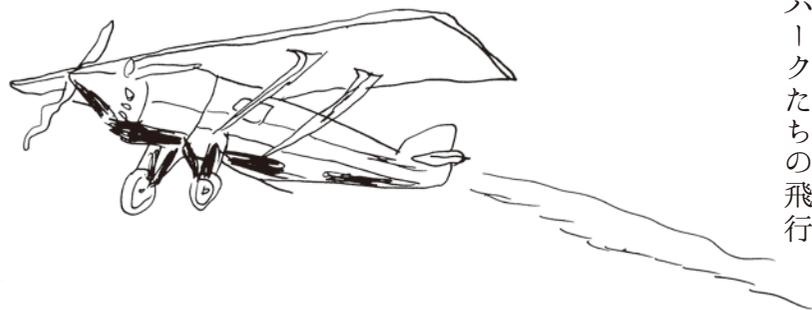
綿布、アクリル
2011年
作家蔵

石原葉十 ゲッコーパーレード — リンドバークたちの飛行

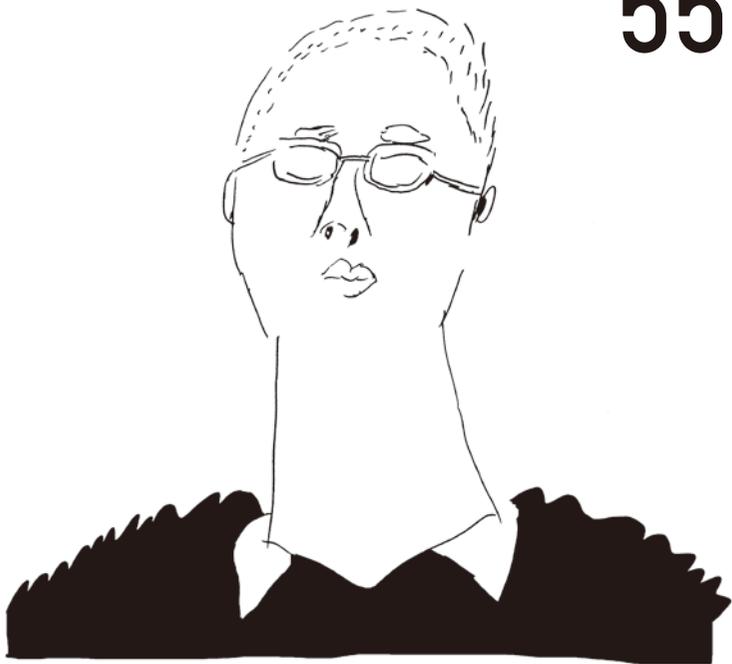
美術作品という枠を外して

ドイツの劇作家、詩人、演出家であるB・ブレヒトの『リンドバークたちの飛行』を山形ビエンナーレパージョンとした今作。演出と演技を担当するゲッコーパーレードは、埼玉県蕨市の旧加藤家住宅を拠点に演劇を行っている演劇集団で、メンバーは上池健太、河原舞、黒田瑞仁、崎田ゆかり、柴田彩芳の5名。コンセプト、全体イメージは石原葉十が担当している。

美術作品を鑑賞するとき、私たちは作品を通して作者について考えたり、その作品の世界で遊んでみたりする。でも、その「美術作品」という枠が外れたらどうなるんだろう。『リンドバークたちの飛行』という芝居の中で、鑑賞者は展示空間を違う視点で見ることになる。



演劇
2018年
実施日=9月21日[金]、22[土]、23日[日]、24日[月祝]
時間=17:00~18:00(参加無料/申込不要)



どこにでも共通してあるもの

宮城県で生まれ、東北芸術工科大学では洋画を専攻しました。卒業後は陽当たりのいいアパートで、悶々と自問自答しながら絵を描いています。大学入学と同時に山形へ越してきました。山形は良い意味でも、悪い意味でも「閉じたところ」だと感じています。宮城県よりも乾いていて、じめじめしておらず、個人的には生活しやすいところだと思っています。また、落ち着いて思考を巡らすことができる場所です。今作「澄んだ空気」は、染みついたもの、痛み、どこにでも共通して在るような。そういうものを描けないか思考しながら描いた絵です。

キャンパスに油彩
2018年
個人蔵

思考渦巻く小さな旅路

僕たち「東北画は可能か？」は、2009年から東北芸術工科大学日本画コース教員の三瀬夏之介、洋画コースの鴻崎正武によるチュートリアルとして旗揚げされました。ぼくたちにとって山形は、未開拓の秘密基地のような場所です。仲間たちとの間で、山形との多様な関わり方や解釈が混ざり、自分一人では生み出せない作品が作りあげられていく。山形と僕たちの化学反応、もしかしたらそれがソウゾウの源泉なのかもしれません。本作はこれまでの作品を「山」と見立て、山の中を散歩しながら不思議な出会いが生まれるインスタレーション作品です。山での出会いは多種多様。それは思考渦巻く小さな旅路なのです。



ミクストメディア
2018年
作家蔵
リーダー=富永和輝



実体の無いものを具現化する

埼玉県出身。幼少時代、庭に大きな穴を掘り高熱を出してから見えない世界に興味を持ち、東北に惹かれ芸工大へ。1999年から精神世界の勉強も並行して始める。大学院から作品の主題は「実体の無いものの具現化」となる。山形は東北の精神風土から幻成、影幻を得て、なにかを追求できる土地だと感じている。陰の特性を持つ者が、陰の表現をすると、そちらの世界へ必ず引張られるので注意が必要である。本作「首かじり」は、そのような宮司からのアドバイスをもとに描いた、三部作のうちの一作。唯識論の第七識の魔境から吹き上がってくるような感覚を命綱に描いた。

岩絵具、墨、透明水彩、絹

2011年

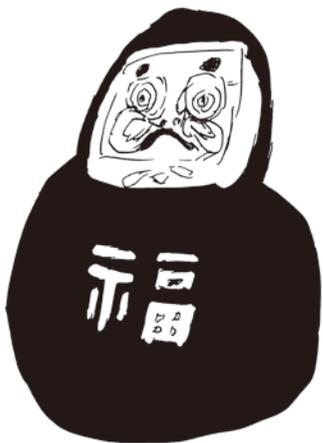
常陸国出雲大社

※本作品については、「幻成する狂気」展の学外会場である「蟹仙洞」にて展示されます。

夢の中に感じた気配

桃の里・福島で生まれ育ち、その後は東京で18年埋もれた個性を探す放浪の旅。ようやく山形にたどり着いたが、早くも10年目だ。山形での山伏修行体験は、自身の肉体的リアルと神秘性を自然に繋げてくれた。この土地の濃厚な四季の移り変わりは、人間の感性を育める。これは作品制作において重要な鍵といえる。東北の自然や文化に魅了されながら、和紙や金箔、岩絵具、油絵具を使い、「桃源郷」をテーマに、奇妙ないきものが住む絵を描き続けている。

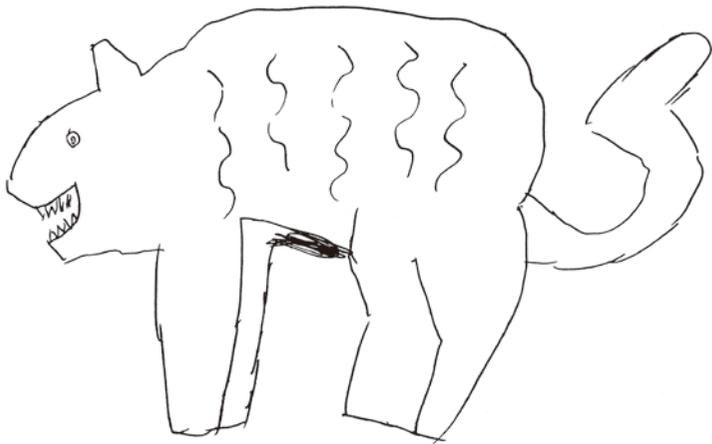
さまざまな異形のいきもの達。それらは「夢の中に感じた気配を具現化した」という自身の願望かもしれない。すべてがぐちゃぐちゃに交ざり合い、そしてひとつになる世界を描いていく。



パネル、麻紙、岩絵具、アクリル、箔

2018年 2015年

作家蔵



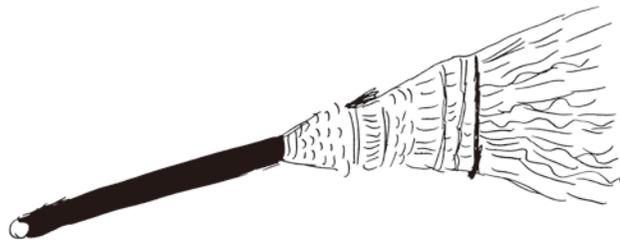
生涯描き続ける道の途中
新潟で生まれ育ち、芸大を目指して東京へ。学生時代は日本画を学んでいたが、アルバイトでディスプレイや壁画の現場仕事に関わり、そのスケール感に影響を受けて表現領域を拡張。主にトラをモチーフとした作品を発表してきた。山形という土地は、人間主体に対するカウンターだと感じている。山に包囲された感覚が、全てをリセットしてくれる。朝、山を見てから一日を始めるのが習慣だ。
現在はドローイングを制作の軸に据えながら、ほぼ運動神経で絵を描いている。今回の壁を覆い尽くしたドローイングは2008年から着手し、これから生涯描き続けるであろう枚数の途中経過だ。学外では、えぐいタブローも展示する。

雑誌、和紙を支持体にミクストメディア
2008年から生涯
作家蔵

雨という名のアクションを

LLP アメフラシとは、東北芸術工科大学出身のアーティスト、作家、デザイナーの集合体。主に長井市でデザイン、ワークショップ、アーティスト活動など、この地だからできることや楽しいことを探し、地域に「雨」つまり「アクション」を降らせ、豊かな潤いで満たしていこうと活動中です。

2017年より、正統な継承者が一人となってしまった長井市に残る伝統産業「金井神ほうぎ」を継承するプロジェクトを開始しました。復活すると共に、それにまつわる事象をすくい上げ、アーカイブ化、アート作品化を行っています。今回は「金井神ほうぎ」を使用したインスタレーションを軸に、文章と平面作品を展示します。



ミクストメディア、金井神ほうぎ、インスタレーション、文章、絵、
2018年
作家蔵



現在と過去が併存する不変の風土

静岡県御殿場市に生まれ、都内の芸術大学を卒業。2015年より教員として芸工大に勤めながら、個展やグループ展での発表やワークショップなどを行っている。現在は家族の住む御殿場と山形とを往来する生活。御殿場は富士山麓と箱根山麓の街で、冬季の降雪量も多く、山々に囲まれた風致は山形ととてもよく似通う。共に山岳信仰のある地であり、両地域の不変の自然観と風土に想いを馳せている。

本作の題名にある「山祇」とは山の神、山の霊のこと。大地は起伏を生みながら何処までも連なり、重なっている。それらを連山として描きつつ、現代に残る信仰、風土、山中他界、そして生命の循環について想いを馳せながら表現した。

日本画技法・高知麻紙、顔料、染料、墨、箔、泥

2018年

作家蔵

初冬の月山を仰ぎ見て

出身は新潟県加茂市。昔から筆筒や建具製造が盛んな職人の町で育ちました。18歳から掛軸製造を行う表具店の絹絵画工をやりながら日本画を学び、日本美術院に出品し続けています。国内外でスケッチ取材を繰り返し、様々な対象と向き合い、その対象を通して何を描くか日々模索しています。

東北芸術工科大学への通勤時にいつも楽しみがあります。自宅を出るとまず蔵王山、それから西の月山を仰ぎ見ることが出来ます。四季折々の美しさに日々感謝しています。今回描いたのは、初冬の月山です。月山は山形市内のいずれの場所からも見ることができ、初冠雪から雪解けまで様々な表情を見せてくれます。写生する場所を決め、取材を重ねました。



和紙、岩絵具

2018年

作家蔵



和紙、岩絵具、青墨、水干絵具

2018年

作家蔵

長野県出身。日本の屋根と言われるほど高山が連なり、観光地としても知られる土地だ。大学進学を機に山形へ。地元とは違った風土で暮らす中、改めて身近にあった山に目が向くようになった。現在、自分自身を通して見える「山」を題材に制作している。遠くの山は青く見えるけれど、近づいていくとその青は見えなくなる。思わず見入ってしまう山は何層にも重なった空気層を通して見える青い山だ。僕自身、その空気層のように山を多層的に見ているのだと思う。今作「蒼連」では、これまでの出会いや経験など、自分の中に積み重なったものを通して見えてくる「山」を描いた。

何層にも連なるその先に

大学で日本画を勉強した後、大学院では古典模写を通して日本画を捉え直し、「星曼荼羅」を題材に図様復元の研究をしていた。現在、文化財保存修復研究センターで、地域の文化財の保存修復をしている。調査を通じて、出羽三山や野原に並ぶ巨大寺院の礎石跡、山奥の遺構などと出会ってきた。この土地では自然と信仰が身近で、古典絵画の世界観が今でも息づいている。

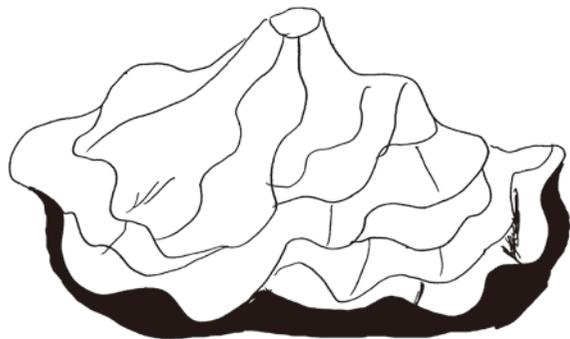
長井市の地形は、朝鮮の古文書「沢里誌」にある理想郷の条件と合致するという。まずは街の眺望や山並みの配置を決め、自然の地形に守られた土地なのだと考えて「十二支の飛天」が守っている構図の曼荼羅を描いた。



紙本着色

2018年

長井市薬師寺



山口県萩市、萩焼の窯元に生まれた。将来は陶芸家になるつもりだったが、大学に入学して彫刻と出会い、その魅力に取り憑かれてしまった。6年間は人体彫刻をみっちり勉強して、陶素材の彫刻を独学で始めた。当時その領域は未開拓だった。自分のバックボーンである陶芸に還っているつもりが、不思議とどんどん遠ざかっていくようだ。

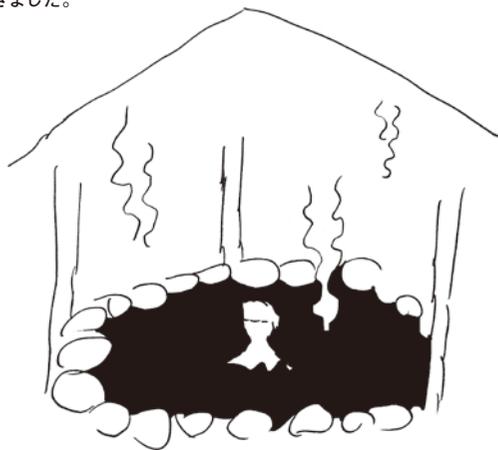
「曙光の水田」をつくる最初のきっかけは、山形出身の写真家・青柳健二さんの作品集だった。美しい棚田の風景は、人間が大地を彫刻したものだと思った。この作品はどここの棚田でもない。二つの空想の山を棚田のように彫刻してみたものだ。朝日が昇る少し前の時間帯を想像して。

大地への彫刻

温泉が好きです

仙台で育ち、美術科のある高校へ進学。芸工大への進学を機に山形へ移り、学部と大学院とで6年の月日を過ごしました。今は仙台の実家で和室を一部屋借りて、油絵を描いています。

山形に引っ越して、まず空の広さに驚きました。そして道を歩いている人の少なさと、温泉の多さにも驚きました。人ごみが苦手、静かな場所と温泉が好きな私にとっては、とても相性がいい土地だと思いました。大学の入学式で理事長が草木塔の話をしてくださり、心の優しい人が多い土地なのだと思った記憶があります。本作は、そんな山形の地域性と、温泉文化の融合を目指して描きました。



キャンパスに油彩、アルキド樹脂絵の具



コンテキストはいかに語られるべきか

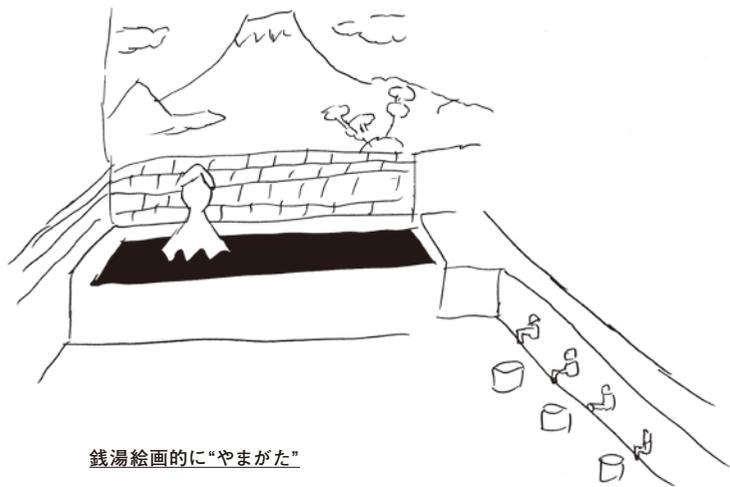
物語とはそのテキストを読む人がそこに登場する固有名詞をイメージして、それを広げていくものだとは考えます。好きなアイドルや憧れの偉人の伝記を読むことが楽しいのは、この仕組みの上のことです。

ここでは、私が私自身を語ることで、作品に描かれた物語の内容について作者が饒舌に語ることに、ひとまず立ち止まり「ちよっと待てよ」と考えることから始めます。コンテキスト(文脈)を語る前に、コンテキストはいかに語られるのか、コンテキストを語るその枠組み自体はなんなのかを、ここで考えてみるべきではないでしょうか。

キャンパス、アクリル絵の具、木材

2018年

作家蔵



銭湯絵画的に“やまがた”

会津盆地で育ち都会のネオンに憧れた少年時代。しかし、大学は山形。虚勢をはろうと極彩色の絵画、気づけば現代アートとして海外で新鮮に受け入れてもらえた。大学卒業後に山形を離れ、助手で戻り、また離れて今度は教員として山形に戻った。山形で学び、出会い、歩み、浸かり20年が経とうとしている。

山形県内最後の銭湯が昨年12月に廃業した。銭湯の壁画は、私たちにとって最も身近な絵画鑑賞の機会だったのではないだろうか。これをきっかけに自身の表現スタイルをいったん放棄して、山形を存分に満喫できる銭湯絵画を描こうと思う。

油絵、キャンパス

2018年

作家蔵



柔道ばかりしていたのですが、あるときに柔道のストレス発散で美術をはじめました。山形にはあと一歩で東北地方最強の男になれるところまで育てられ、たくさん鍛えていただきました。ありがたく、かわいがってもらえた場所です(笑)。今は武道、美術を専門的に学んだ経験から、文化理解や歴史伝達を目的に「概念芸術としての武道」を現代美術に成立させようと模索しています。今作は山形の戦争史跡の調査をもとに、戦争の記憶に背負い投げをかけました。戦争という近くて遠い地元の物語を背負い上げていこうと思います。

慰霊碑の記録を背負い投げ

背負い投げ、石碑、戦前の記憶等

2018年

作家蔵



まるで自然に擲掬されているような

山形県長井市生まれ。芸工大を卒業した後、京都の大学院へ進学し、数年前に山形に戻りました。作品は絵画、映像、インスタレーションを発表しています。現在は地元の長井市でクラフトビールも作っています。薪が欲しくて、20年ぶりに山に入りました。昔まであった雑木林までの山道には植物が生い茂り、山小屋は潰れて朽ち果てていました。畑だった場所も笹藪に覆われ通路を切り拓くだけで2日かかってしまいました。切っても切っても生えてくる植物や山の生命力を前にして、自然に擲掬されているような感覚を覚えました。大きな自然の中では自分の行動がとて滑稽に思え、その気持ちを作品にしました。

インスタレーション

2016～2018年

作家蔵

猫と学べば

私の名前はジャンゴ……と呼ばれている。生まれた土地については忘れた。今から約5年前、暑い夏の夜のことだった。私はこの地に迷い込んでしまった。そんなとき、ある人に出会った。その人は、私を見て靴の中から食パンを取り出し水に浸してくれた。あのパンの味は格別だった。それ以来ここに住み続けている。

この5年で子どもができたり、脱水症状になったり、大変なこともあったがなんとか生きている。ここにいてご飯や水をもらえるし、声をかければ反応もしてくれる。人間達は私にスリスリしてくる。馴れ馴れしくて困るときもあるが、仲良くしてくれるのは……まあいいかな。

いつも大学周辺を歩きまわっている。ここは自然がいっぱいだから散歩が楽しい。ここに来れてよかったな。



テキスト=100ものがたり調査班

水野健一郎

アブダクシヨ

岐阜県土岐市に生まれ、幼少期からTVアニメに心酔。高校時代には映像研究会立ち上げメンバーとして自主制作アニメを制作。その後、砂丘と学科名に惹かれて鳥取大学工学部社会開発システム工学科に入学するも、上京して美術に方向転換。現在は展覧会を中心に、ジャンルを超えたアーティスト活動を展開。映像チーム「超常現象」、美術ユニット「最高記念室」としても活動。2013年からは東北芸術工科大学の非常勤講師として毎週東京から山形へ。

今作では、2008年に考えた物語と2013年に東北をモチーフに考えた物語とを合体させた新たな物語のアニメ化を仮定し、その制作過程で生まれる設定やビジュアルの断片を拡張する。



ドローイング、ペインティング(キャンバスにアクリル絵具)、冊子、アニメーション

2018年

作家蔵

学内に、笑顔、散らばる

ファッションデザイナーを目指して美大へ進学したのですが、気づけば美術にハマってそのまま大学院まで進学。その後は美術作家として活動するも、見切りをつけてイラストレーターへと転身。京都造形芸術大学で教鞭をとりながら活動を続けています。2014年、山形ビエンナーレに出展するために、はじめて山形へ行きました。大学の同級生が住んでいたり、長井市の仕事に関わらせていただいたりと、ご縁が続いています。山形はそばがおいしいですね。笑顔をアイコンとしたバルーンを学内に発展させる「とんぼせんせいバルーン」。山形の名産にも展開させたりと、その内容は目白押しです。



塩化ビニール、吸盤

2015年

作家蔵



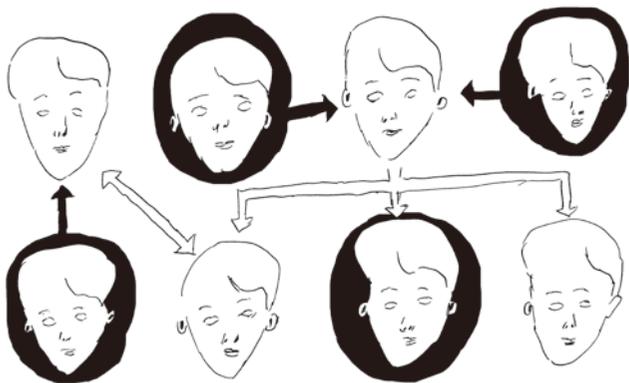
静岡の富士山の麓で育ち、その湧き水を飲みながら画業を修練してまいりました。川や山でいろいろな光の様相を経験し、それらを絵で再現することに没頭してきました。その中で「一番手応えがあったのは、「カメラのストロボが一瞬を捉える様子」を再現したときでした。ふわふわしたその手応えを掴むために、絵を描き続けています。山形は地図でのみ知る、未知の土地でした。しかし、ミルクケーキはその未知から来るおいしいモリス(二枚岩)として、私の人生の何パーセントかを占めてきました。山形は繊細かつハイカラ、かつ牧歌的なイメージが混ざった記憶の特異点です。今回はそんな私なりの山形のイメージをテーマに絵画を制作しました。

繊細、ハイカラ、牧歌的

アクリル画、アクリル絵具、パネル、キャンバス

2010年

個人蔵



1972年岩手県生まれ。現在は東京でグラフィックデザイン、イラストレーション、アニメーション、映像制作等を行っています。岩手にいた頃、何度か蔵王温泉スキー場に行きました。現在、「山田川」という架空の世界を舞台にした作品を制作していますが、その当時の印象が無意識のうちに入っているのかもしれない。「やまだがわ」の中に「やまがた」が入っていますし、「山田川」が変形すると「山形」になります……。

今回は山形をテーマにした相関図と、架空の世界「山田川」を描いたアニメーションを制作します。それら二つも相関関係になっており、「山形」の近景と遠景、自分なりの言葉で言う「伴内と伴外」が表現されます。

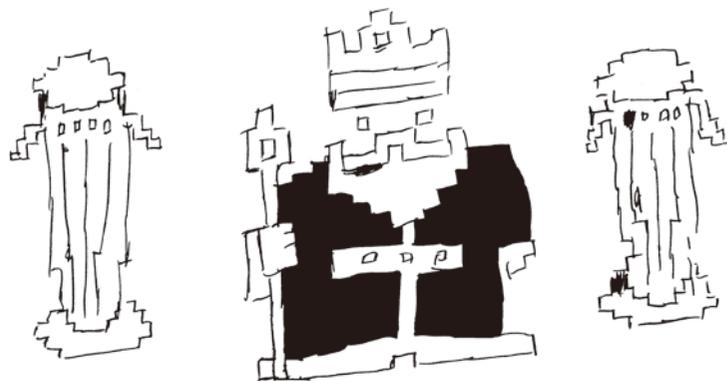
近景と遠景、伴外と伴内

デジタルグラフィックデータから出力(相関図)、
アニメーションをタブレットから映写(よしるマシン)
2018年

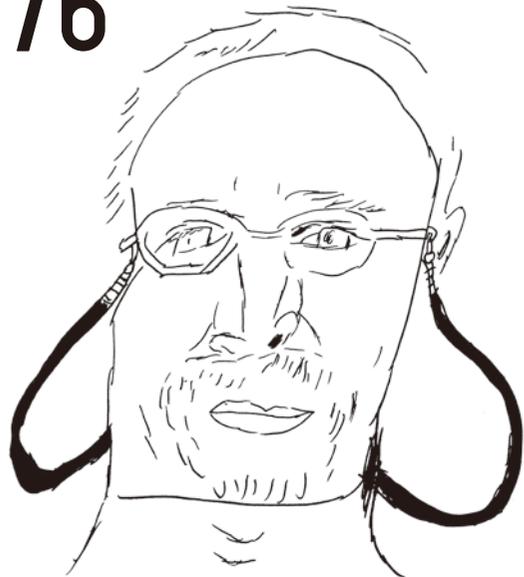
主体をずらすと、どうなるのか

東京生まれ東京育ち。東京藝術大学修了。現在はゲーム本来のゲーム性を排除した「悲しいゲーム」というシリーズで、市販のゲーム機で動作するインタラクティブなゲーム作品を発表しています。ゲームプログラムを作成し、基盤にハンダ付け、ひとつのカセットにパッケージするところまで、全て手作業で行っています。

ドラゴンクエストの主体は主人公であり、プレイヤーである「私」が操作を行います。ですが、その世界内では多くの人々が点在し、そこで生活を営んでいます。彼らに主体をずらすとどうなるのか。セーブ係でもある王様を主体にした「悲しいゲーム」シリーズの第13作目「王様ゲーム」などを展示します。



ミクストメディア
2018年
作家蔵



ハードコアです。

80年代にコンペで受賞、1988年からデザインソフトのIllustratorと絵の先生を同時に始めて、今も状況は変わってません。絵やイラストについて書籍出版、Eテレで授業、トークや寄稿もよくします。90年代にはスキーを始めました。自分にとって山形といえば、蔵王温泉スキー場です。むかし『樹氷』という有名なクーラーがあって、本物の樹氷を見たとき「これが樹氷かぁ」と感動しました。

このシリーズは描きたいモノがあって描いたのではなく、試したい描き方があって描いたものです。「虫」「アレキサンダー大王」「自動車」「古代ローマ兵」などがあります。

Adobe Illustrator 7.0j

2001年(2018年部分的に変換再出力)

インターネット蔵

20年前に見ていたもの

青森県で生まれ、父の転勤に伴って山形県、秋田県、福島県に住み、その後大学進学を機に上京し、現在東京で作家活動をしています。せっかくなら岩手県、宮城県にも住んで東北制覇したかった、という思いがあります。

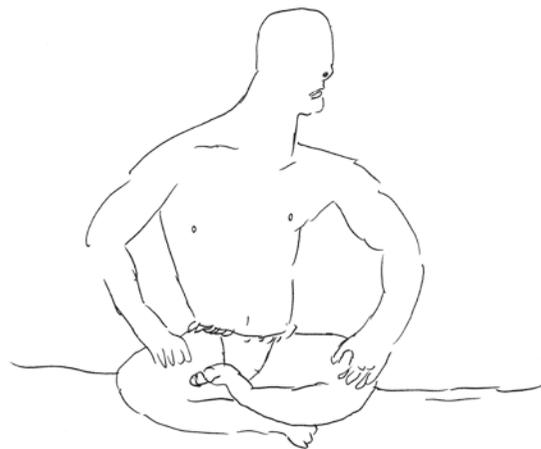
山形には幼少期に約10年間住んでいました。たとえば、空き地や公園などの風景。自分にとっての山形は、その時の記憶で止まっています。今作は山形に住んでいたころ毎日のように見えていた「山」をモチーフとした作品です。今回のビエンナーレをきっかけに約20年ぶりに山形に行くので、自分の中の山形が更新され新しい関係ができることを期待しています。



デジタルデータ、プリント、モニタ

2018年

作家蔵



絵[場⇔物⇔図⇔人]という、何か

1990年新潟県生まれ。上京し美大で絵画とデザインをかじって卒業しフラフラしているところ水野健一郎氏に美術ユニット「最高記念室」に誘われ、本展も含めいろいろな場所で展示の機会を得る。普段は東京で暮らし、会期会場未定の個展のため制作しているだけで東北にはなんの縁も無かったが、本展のために初めて山形へ行き地元の学生や作家らと交流を持つ中で東京やその他地方都市にはない独特の文化的地場(あるいは東北という自意識そのもの)を感じ、同じく地方だがそういったアイデンティティのない地元思いを馳せる。本展では普段制作している絵、あるいはそのようなものを展示空間に配置する。

ミクストメディア

2018年

作家蔵

網膜的な、あまりにも網膜的な

山形生まれ、山形育ち、ではあるものの、僕は山形弁を喋りません。親も友達も皆、山形弁で話します。言葉は本から学びました。幼い頃の僕は、ぎこちない、独自の標準語で話していたのだと思います。今思えば、とても孤独な少年時代でした。蔵王を見ると、その頃の事をよく思い出します。いつも校庭にある小高い丘から、山を眺めていました。上京後、グラフィックデザインを勉強し、卒業後はデザイナーとして働きました。ただ、いつも芸術家でありたいと思いやってきました。だいたい蛇行して生きてきたと思います。誇るべき経歴はなく、絵画は独学です。常に模索をしています。この作品は、自分にとって、次なる作品の手掛かりとなる作品です。



パネルに紙、アクリル絵具、油絵具

2018年

作家蔵

人類最初の『球体の家』とは？

長い間、絵を描き映像を作ってきた山形出身のわたし永岡と、現在「発酵」を追究する料理研究家の井口和泉さん、縄文が好きな土器作家の熊谷幸治さん、高知で暮らして自ら竹を伐採し、籠や笊を作る山崎大造さん、山形の自然や信仰から着想を得てテキスタイルを制作する玉手りかさんをはじめ、多くの人達とともにプロジェクト『球体の家』を実施します。

そもそも『球体の家』の中で生活すると、それに合わせて家も転がりながら移動していく。生活スタイルも価値も考え方も、転がらない家に住むそれとはまるで違います。今回は『最初の家』と題し「もし人類が最初の球体の家を作ったら、それはどんなもので、そこでの暮らしはどのようなものか」について考えてみます。



インスタレーション

2018年

作家蔵



頂上からなにが見えるのだろうか

私の生まれは宮城県の多賀城市です。東北芸術工科大学への入学を機に山形に移り住み、6年目となりました。山形は都会よりも情報が届かない分、自分で自由にやりたいことを突き詰められる場所。自然がまだ力を持っているこの場所から、人間がつくり出した都市を見ることは、私に大きな刺激を与えてくれます。

ドローイングによって彼女（＝わたし）の内面をすべて引き出します。10000点のドローイングを描くことを登山に例えるならば、山頂に到達したときに果たしてどんな景色が見えるのだろうか。ドローイングそのものが目的ではなく、その先に待っている感覚を重要とした作品です。

紙、ペン、絵具、ミクストメディア

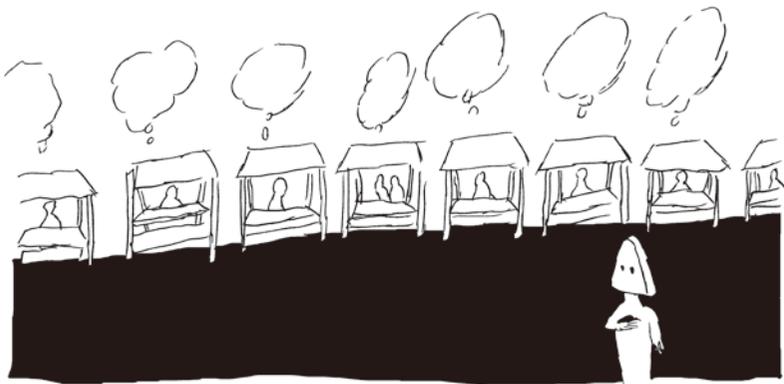
2018年

作家蔵

妄想をヤタイにつみこんで

総合美術コースでは「人と社会をアートでつなぐ」をビジョンに掲げ、社会教育と芸術を結びつける方法を学生と一緒に探究しています。そんな私たちが山形ビエンナーレに関わると、どのようなプロジェクトが生まれるのでしょうか？この問いに対するひとつのアクションとして、誰でも参加できるような企画を立てました。

今回のテーマはズバリ「妄想」です。山のような形をしたヤタイにそれぞれの妄想（アイデア）をのせた空間をつくります。まち歩きを机の上で追体験できるカードゲーム専用のヤタイや趣味の店、小さなカフェなど、一人ひとりのやってみようことを試しに実現してみる場を目指しています。持ち込みヤタイも大歓迎です！



アートプロジェクト
2018年



茫漠たる社会の教科書から

仙台で生まれ育ち、大学進学を機に近くも遠い存在だった山形へ。僕の人生は、とある本屋とおばあちゃんとの出会いによって大きく変えられた。建築と人との関係に魅了されてしまったのだ。僕のフィールドである七日町のシネマ通りから学ぶことはまだまだあるだろう。いまは「現象」として魅力的な建築を探っている。積もりに積もった課題と向き合いながら、もうしばらく自然な流れに身を委ねてみたい。

山の形をしたヤタイなのか。それとも山のようにたくさんあるヤタイなのか。木で構成されたこの作品は、みんなとDIYで作り上げる「人と町を繋げるツール」だと思っている。

セルフビルド、木
2017年
東北芸術工科大学



忘れ去られた傘

ああ、ここに来てどれくらいの日日が経ったのだろう。短かったような気もするし長かったような気もする。近くで何かが起きていたみたいだが興味もない。もういろいろなことを忘れてしまった。自分が何なのかも……。自分が居なくなっただけに誰か気づいているのだろうか？ 誰も気づいていないかもしれない。そもそも自分はどんな風に思われていたのだろうか？ みんなから必要とされていたのだろうか？ ただの便利なやつだと思われていただけかもしれない。

いや、こんなことを考えるだけ無駄だ。自分に問題があったのだろう。またひと眠りするとしよう。次起きたときにはどれくらい経っているのだろうか……。

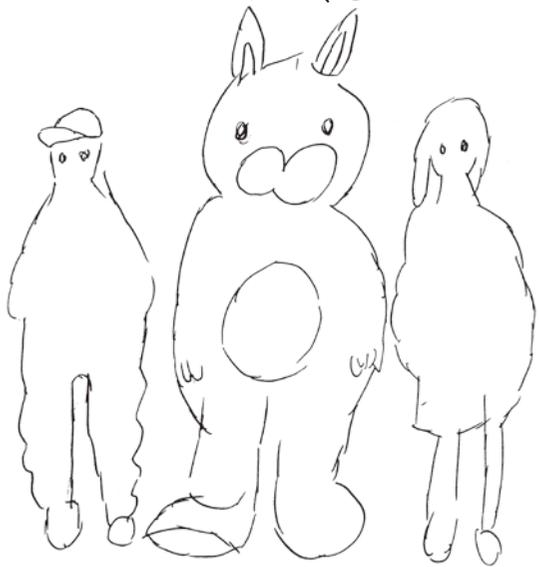


テキスト=100ものがたり調査班

「当地との声なき触れ合い方」

東北芸術工科大学・総合美術コースの市川ゼミ有志と、朝日町の「当地キャラクター」桃色ウサヒの中の人による共同制作チーム。山形県の自治体がPR用に作成したキャラたちの「山形キャラ図鑑」を作っている。県内の全自治体へのヒアリング調査を通じて、まだ足を踏み入れたことがない町や村の存在とその魅力を知った。個性豊かな「当地キャラたち」によって、未知の国々へと導かれていくようだ。

山形県内のキャラたちで飾られた祠型のオブジェ。その土地の特徴を外観に反映させたキャラたちは、まるで現代の御沢仏のよう。各地域の想いを背負って生まれてきたキャラ達との声なき触れ合いをお楽しみください。



ミクストメディア

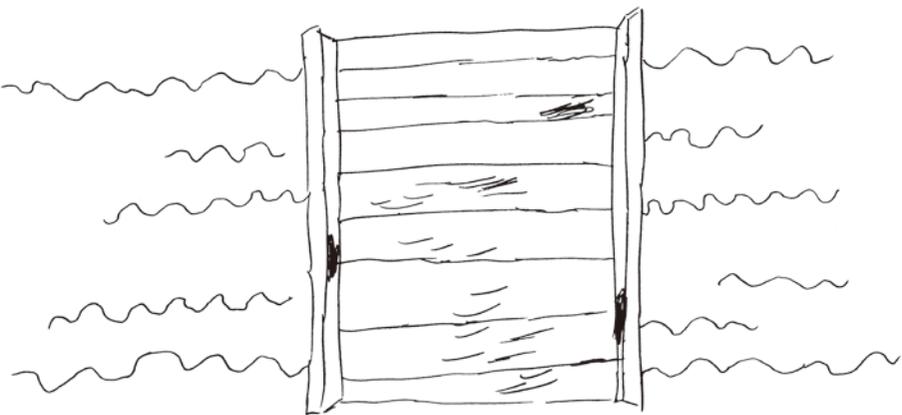
2018年

作家蔵

メンバー=佐藤恒平、大久保明香、高瀬快

思い出ほとほと

アトリエ棟から工芸棟に向かう道に架かる小さな木の橋。そこではしばしば不思議な出来事が起こるといふ。その橋を渡ると手に持っているものを知らず知らずのうちに落としてしまうらしい。大切に持っていたはずが、橋の下を流れる川に落としてしまう。せっかく山で見つけてきたものも、観光で買ったお土産も、そこではなかったかのように水に流されてしまう。もしこの橋を渡ることがあれば、大事なものはしっかりと握りしめておくことをおすすめする。あるいはリスクを承知の上で誰かの落し物を探してみるのもいいかもしれない。ちなみに、100ものがたり調査班が訪れた際には「鳩サブレ」を発見したことを付け加えておく。



テキスト=100ものがたり調査班

黄昏時の竹林

その日、私は課題を終わらせて工芸棟から学食に向かって歩いていました。まだ明るいはずなのに、その日は異様に空が赤く薄暗かったのです。思い返すと不気味ですが、そのときは何とも思いませんでした。途中で竹林のそばを通ると、一輪の美しい竹の花が目に見え込んできました。どれくらい眺めていたかは分かりません。ふと我に返ると、辺りは時間が止まったように静まり返っています。なぜか階段もずっと向こうまで続いて見えました。そんな中、竹林から視線を感じて視線を移すと、そこにはひっそりと佇む人の影が……。次の瞬間、全てが元通りで竹の花も消えていました。後から調べたことですが、竹の花が咲くと不吉なことが起こる前触れだといふ。あの人影はなにかのメッセージだったのかもしれない。



テキスト=100ものがたり調査班

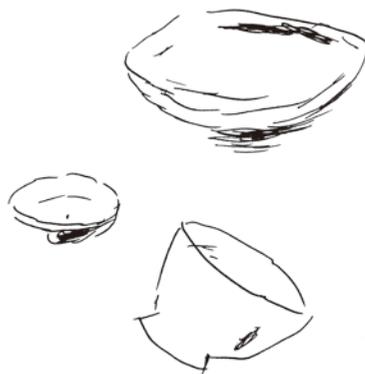
非日用的な器で飲むコーヒーの味

AGAIN-STは教育に関わる彫刻家、美術館学芸員、デザイナーの6人で立ち上げた彫刻と教育を考えていくグループ。彫刻が抱える問題をテーマに、展覧会とトークを行っています。L PACKは「コーヒーのある風景」をテーマに、美術やデザインを横断する小田桐奨・中嶋哲矢の二人によるユニットです。

今回はAGAIN-STとL PACKがコラボレーションし、「彫刻のある喫茶店プロジェクト」を行います。店名は「NELL MILL」です。器は卒業生や在生による作品の中から、あまり日用的でないおもしろいものを選びました。アーティストの作るモノ、つまりオブジェクトが、どのように人々の過ごす時間に働きかけるのかを考えます。



コーヒー、器、彫刻、様々な什器
2018年



買い物の後にはコーヒーをどうぞ

日本各地から注目される若手～中堅陶芸家、工芸コース陶芸専攻の卒業生・在生から厳選された作家を集めました。今回は特に「生活陶芸」と「現代陶芸」という視点から、陶器、磁器の差だけでなく、多様な作風の陶器たちをセレクトしています。中には開店と同時に完売が予想される作家も出店します。

参加作家一同、素晴らしいロケーションの中で販売を嬉しく思っています。陶芸作品という最も生活に寄り添うアートを通して、豊かな暮らしを手に入れてみてはいかがでしょうか。みなさまが必ずお気に入りの器と出会えることを信じています。晴天に恵まれますように。



陶磁器

2018年

実施日=9月1日[土]、2日[日]

時間=10:00~17:00



とある「羊」の休憩時間

俺は、この裏にある悠創の丘の、さらに奥の山からきた。まあいろいろあつてだなあ……こんな所にいる。これも何かの縁だ。昔ばなしでもしてやる。

昔、俺は多くの狩人に狙われていた。理由はこの青色の毛だ。人は珍しいものに目がないからな。山の中をひたすら逃げていたら、偶然にもここに辿り着いた。しかし、ここも人が多くて危険なことに変わりのない。とはいえ、飲まず食わずで逃げてきたので、もう動けなかった。人目にはつきやすいが、見晴らしのいい場所だからここに居座っている。

今は、日が昇っているときはジッと動かず、夜になると食べ物求めて移動する。見つけたときは遠くから見守ってくれ……もう逃げるのは……疲れた……。

引地拓 《そうであって、そうでなくて》

鍛金、溶接

2017年

テキスト=100ものがたり調査班



探し出せ！命を繋いだ“あしあと”

青い羊の語りより

「あれは狩人たちに追われているときだった。どうやら俺を捕まえると懸賞金が出るらしい。そのおかげで毎日のように逃げ回っていた。そんなある日、ひとりの男に会った。身なりは狩人だったが、俺に食料と飲み物、隠れる場所を与えてくれた。命の恩人だ。しかも不思議なことに、この男は俺の言葉を通じるらしい。数日が経った頃、必死になって逃げていると、あの男が現われて追手の行く手を阻んだ。後ろからは狩人たちの怒号が聞こえる。その直後……、大きな地鳴りがした。振り向くと、その男の足元は深く陥没していた。狩人たちが啞然とする中、俺は逃げ切ることができた。後で聞いた話だと、あの男は《森の現人神》だったようだ。そして今もおその“足跡”が残っているという。」

テキスト=100ものがたり調査班



見守るまなざし

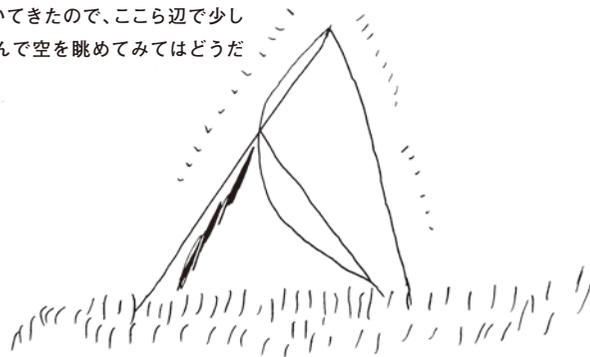
こども芸大のそばを流れる小川を挟んだ小さな丘の上に小さな祠がある。そこに鎮座するのは、あたかも子どもたちを見守るかのようにつむむお地藏さん。その表情は摩耗してよく見えないが、どこか温もりを感じさせる。果たしてここでは何が祀られているのだろうか？ 過去に起こった何かしらの出来事を風化させないための記念碑かもしれない。今となってはその真実を知る者はいない。ただ今日もお地藏さんの前には子どもたちがお供えした松ぼっくりが転がっている。

テキスト=100ものがたり調査班

寄り道

この付近の芝生にはところどころ剥けているところがある。どうやら工芸棟にいた青い羊が時折山を下りては食べに来ているようだ。食べられたところは《森の現人神》が己のその力で植物の成長を促している。それをまたあの羊が食べに来る。こうして今でも手助けをしているらしい。さらに身近な場所で見守られているように、銀色の「祠」に住みついたという。今にも天を買かんとするその様は、外敵から羊を守る《森の現人神》の力が具現化したものか……。今では私たちのことも見守ってくれているようだ。

長いこと歩いてきたので、ここら辺で少し芝生に寝転んで空を眺めてみてはどうだろうか？



小林泰彦 《High Sky》

ステンレス

2013年、東北芸術工科大学

テキスト=100ものがたり調査班

テキスト=100ものがたり調査班



鬼瓦をめぐる挿話

芸工大の本館を背景に建立された能舞台。その屋根には表裏一對の鬼瓦が鎮座しており、それぞれ大学と月山を見つめている。人間の内から生み出される妬み、憎しみ、憧れ、欲望の怪異。外から訪れる物の怪の類。これらから学生を守るべく睨みをきかせる。しかし、彼らにはこの地を守るにあたり与えられた代償がある。互いに背を向けているために片割れの顔を拝めないというものだ。その孤独に夜な夜な人知れず涙をこぼすという。溜まりに溜まった涙はいつしか鏡池となった。鬼の涙が作り出した池は不思議な力を持ち、生物が棲むことは出来ない。勿論、人間も不用意に足を踏み入れてはいけない。

とはいえ、全ての怪異を防ぐことはできない。鬼瓦が看過したもの。それがこの「ものがたり」たちなのである。

テキスト=100ものがたり調査班

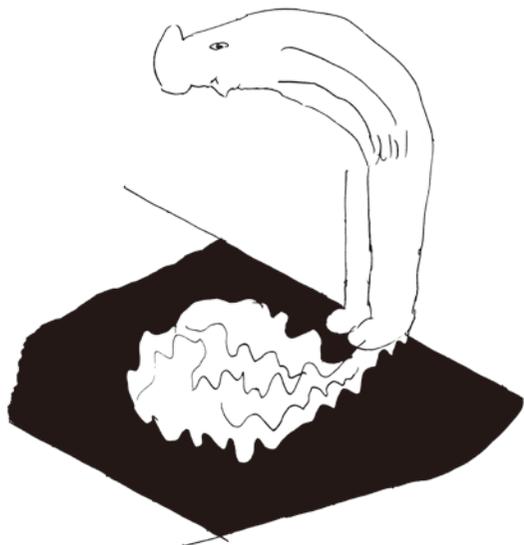
何に見える？

山形のまちを望む小さな池。晴れた日は、遠くに望む月山を背景に澄んだ青空を三角形に切り取る。その真ん中あたりに小さな像がちよこんと座っている。幼い子どものようにも見えるその像は、時折その位置を変える。どうやら真夜中になると勝手に動き出すらしい。

そんな噂はさておき、この像は見る人によって見え方が変化するという。こども芸大に通う子どもたちに聞いてみたところ、「かみさま」「ほしくん」「なつみちゃん」などいろいろな呼び名がついているようだ。中には「かっぱ」という説もある。なるほど、言われてみればそう見えなくもない。さて、あなたの目はどのようなように映るだろうか。



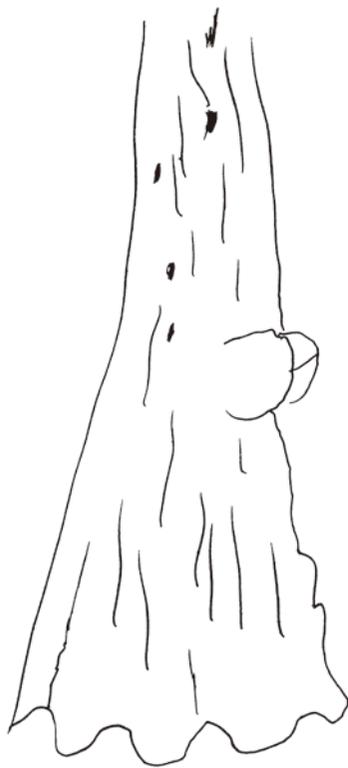
テキスト=100ものがたり調査班



鏡池が映すもの

芸工大の本館に向かって架かる鏡橋。同じ名前をついた橋が北海道の「網走監獄」にもあったらしい。そこでは、監獄に向かう人々が橋の上から覗いて水面に顔を映していたという。奇しくも同じ名前につけられた二本の橋。果たしてその真相やいかに。

実は、「鏡橋」という名前にはもうひとつの意味が込められている。監獄から出所する人が再びその橋を渡るとき、以前とは変わった自分自身の姿を見たそう。学びの場としての大学に鏡橋を架けた背景には、学生一人ひとりが成長を実感してほしいという思いが込められている。橋の下に広がる鏡池にそれぞれの顔を映しながら、自分たちはここで学ぶのだというスイッチの切り替えをするために。風のない静かな日には池を覗いてみてはいかがだろうか。



ご神木のきた道

昔あるところに病気を抱えたご神木があった。樹齢は600年を超えるとも言われている。長い間にわたり大切に大切に扱われていたので、簡単には処分できず主は困っていた。そんなとき、この大学の創設者である元理事長の徳山詳直先生が「大学のシンボルに使えないか」と提案し、そのまま引き取られたという。ご神木のこぶには生命感が溢れており、この大学の精神の支柱、核になるだろうという願いを込めて。このご神木を大学に運び込む際には、そのままでは入らなかったため、一度入り口を解体したそうである。そこまでしてこのご神木を迎え入れたいという元理事長の思いを伝えるものがたり。

良質なデザイン、集めました

「山形エクセレントデザイン」は、魅力的で競争力の強い商品づくりとデザインマインドの向上を目指す事業です。デザインとは、モノの色や形だけでなく、問題解決のために計画を立て、いろいろな創意工夫する行為。この視点に基づいて、県内で企画・開発・生産されている製品を対象に、優れたデザインの選定と顕彰を行っています。

今回は「山形エクセレントデザイン2017」受賞製品の展示をはじめ、受賞企業とデザイナーによるトークイベントやものづくりワークショップなど、山形のデザインとものづくりをさまざまな面から掘り下げる展示やイベントを行います。



主催＝山形デザインコンペティション実行委員会

事務局＝工業技術センター



芸術とデザインで育む山形の未来

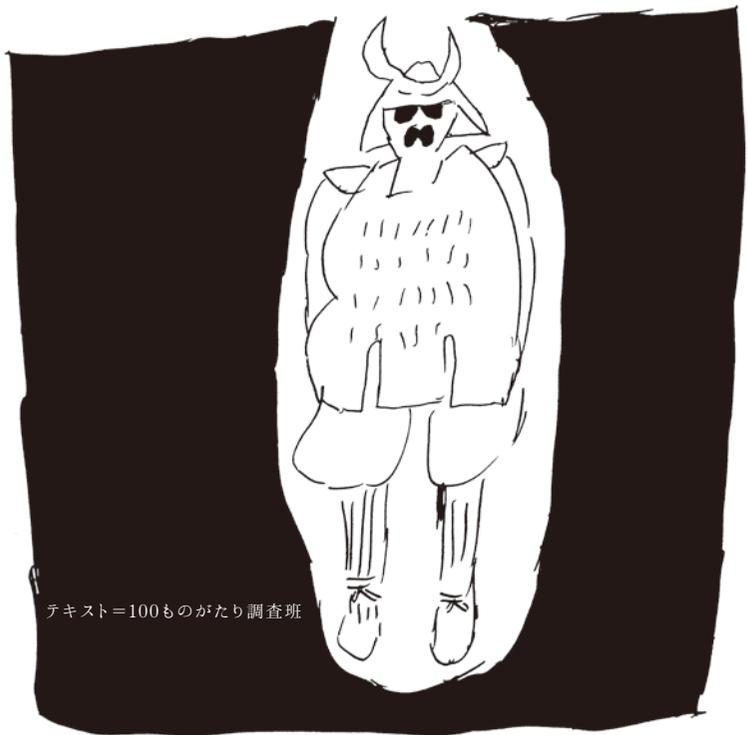
2013年度の卒業制作展に合わせ、中山ダイスケ教授(現学長)がディレクターとなり、ビニールハウス型の空間で展示を行ったのが始まり。本学の産学連携活動を、個々の「苗」に見立て、農作物が豊かに実るように、じっくりとこの土地に根ざし取り組んできた成果を紹介して参りました。

今回は「特産品と芸工大」「自治体と芸工大」「建築と芸工大」「芸術祭と芸工大」など、20以上のテーマを設定しました。山形の名産品となった商品や、リノベーションの完成模型、プロモーションビデオなどを展示して、本学が関わった活動実績をお伝えします。

噂の「首塚」ありました。

いわゆる「百物語」というものは、百話語り終えると何かが起こると言われている。芸工大の「100ものがたり」にも最後にふさわしい話がある。この大学には首塚がある。デザイン棟の裏にある鬱蒼とした土手。そこはかつて首塚だったという。どうやら江戸時代からあるらしい。大学を建てる際にもここだけはとり壊すことができなかつたそうだ。噂が噂を呼び、真夜中にその近くに誰かが立っていたという目撃証言も。分かりにくいところにあるため、芸工大生もほとんど近寄らない。

今回、100ものがたり調査班で改めて現地に訪れてみた。すると、その実体は「將軍塚」とある。どうやら古の戦に縁のある場所のようだ。虚構と現実の境目から生まれるものがたり。ビエンナーレの帰り道、ふと立ち寄ってみてはいかがだろうか？



テキスト=100ものがたり調査班

修復は可能か？

「この像を修復することは可能だろうか？」と胸に問いかけてみる。

それは保存修復家の友人に案内され、山形のとある中山間地域を訪れた時のことだった。彼が調査の最中に出会ったという奇妙な風神雷神の画像を見せてくれた時には胸が躍った。奈良で生まれ育った僕にとっては見たことのない素朴でどこか不自然な造作、しかしそれでいてなぜかこちらに強く迫ってくる像に圧倒された。

大学から小一時間ほど車を走らせたそこはすでに廃村となっており、神社は管理されることもなく鳥居は倒れ、屋根は崩れ落ちている。残雪の湿気とカビの匂いが充満する暗いお堂の奥底で風神雷神は僕を待っていた。そしてそれは、思っていたよりもか弱く小さな小さなものだった。

この像はこれからどこにあるべきなのだろうか？

丁寧に修復して博物館に納める。しかし、そこは本当の意味ではこの像のあるべき場所ではない。しかし、この像を待っている者はもういない。このままでは来年の今頃には豪雪に押し潰され、いつしか土に還るだろう。それはそれで美しい結末か。

機能を失ってしまった神々の行く末を案じる内に、最初の問いはいつしか「地域の修復は可能だろうか？」という問いへと変わっていた。

今、山形を考えることは、決してここだけの問題ではない。それはもう壊れ失ってしまったことに気付くということであり、それをどのように回復するのかという辺境と呼ばれる場所すべての問題でもある。

本展覧会では、過去の遺物と現在の問題をつなげる交差点として空間を作り上げた。時空を超えた出会いのものがたりを読み解いてほしい。

三瀬夏之介

三瀬夏之介

Natsunosuke Mise

日本画家。1973年奈良県生まれ。東北芸術工科大学教授。2009年VOCA賞受賞。作品は和紙と墨、金箔など日本画の素材を用いて大画面を構成し、伝統的な素材を用いつつも、現代性をもった大きなイメージとなっている。現在は東北地域における美術のあり方を問うプロジェクトを展開している。主な展覧会は、「日本の絵 三瀬夏之介展」(2013・平塚市美術館)、「近くへの遠回りー日本・キューバ現代美術展」(2018・ウィフレド・ラム現代美術センター)他。



忘れられた山形を掘り起こす先に

本展覧会「山のような100ものがたり」は、「ラボラトリー」、「インキュベーション」、「コンテンツボラリー」、「コラボレーション」、「アーツ&クラフツ」の5つの区分からなり、私はそのうちの「ラボラトリー」=「現代山形考」展を三瀬夏之介氏とともに担当している。美術大学である東北芸術工科大学は、教員の活動にしろ学生の活動にしろと、アート作品の制作やプロジェクトが目につくと思うが、それと同時に、美術史、考古学、歴史学、民俗学、などといった様々な学術的な研究もおこなわれている。今回の「現代山形考」ではこうした本学および山形県内でおこなわれている研究に焦点を当てた展覧会である。

今回は「山のような100ものがたり」のテーマである「山形らしさ」を汲み取ることができるトピックを取り出し、展示を構成している。取り上げたトピックは、文化財保存修復研究センター、美術史・文化財保存修復学科でおこなわれた研究と、私がおこなってきたものを中心に構成している。本来は、本学で研究されている前述のような諸分野の研究成果を展覧会に総動員できれば良いのだろうが、私のバックグラウンドが美術史や文化財修復方面にあり、それ以外は自らのキャパシティを超えるため、分野を限定することをお許しいただきたい。

また、本展覧会は単に研究成果とそれに関する博物資料を展示するのではなく、それらにインスピレーションを受けて新たに制作されたアート作品を並列的に展示している。アーティストたちにインスピレーションを与え、現代的な意義を持ち、また実作品を出展可能なものの中から各トピックや作品を選出した。真逆の視点として、出展する博物資料がアートによってなにかしら未来に向けた補助線が引かれることも期待している。

研究成果やトピックは「山形らしさ」を汲み取ったものを書いたが、今回実際に取り上げているものは一般に山形らしさとして意識されるものではなく、むしろ忘れられてしまった山形の一側面が少なからず含まれているように思う。たとえば、今回特に大きく取り上げているトピックとして、山形市出身の彫刻家、新海竹太郎がある。新海は山形県出身の芸術家としては最大級の実績がある人物だが、どういうわけかそれに比べると現在の県民からの知名度は低い、「山形らしさ」として挙げられることもないだろう。実は1868年（慶応4年＝明治元年）生まれの新海にとって、今年2018年は生誕150周年というメモリアルイヤーにあたる。この機会に、新海を通して「山形らしさ」を考えてみたい。そしてこの150年という年月は山形の近代化の歴史でもあるし、明治時代以降の近代国家としての日本の歴史でもある。

本展覧会では、新海に限らず研究成果と博物資料、そしてアート作品を通して、「山形らしさ」の一側面を示すことによって、さらにはそこに日本列島全体に通底する要素も見いだすことができるかもしれない。

宮本晶朗



宮本晶朗
Akira Miyamoto

1976年生まれ。早稲田大学卒業。東北芸術工科大学大学院修士課程保存修復領域（立体作品）修了。白鷹町文化交流センターにて学芸員として勤務（2008～2014）し、仏像等の文化財やコンテンツボラリーアートの展覧会を企画・開催。また、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター学外共同研究員として、山形県内を中心に仏像等の調査・研究や保護活動に参加。現在は、地域文化財の修復・保護とそための支援をおこなう株式会社文化財マネージメントを経営。日本初となる「仏像修復クラウドファンディング」など、文化財の修復費調達のためのクラウドファンディングもおこなっている。

〈開催概要〉

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2018

山のような100ものがたり

会期=2018年9月1日[土]～9月24日[月・祝]

※期間中の金・土・日・祝日のみ開催

会場=東北芸術工科大学キャンパス

キュレーション=三瀬夏之介

企画展「現代山形考」

キュレーション=三瀬夏之介、宮本晶朗

展示デザイン=アイハラケンジ

〈プログラム〉

1) ギャラリートーク

企画展「現代山形考」スペシャルトーク

本展のキュレーターが誘う周遊型トークツアーです。会場に所狭しと置かれた民俗資料とアート作品の関係や、展示に隠されたメッセージを学識者と共に読み解いていきましょう。

実施日=9月1日[土]、8日[土]、15日[土]、22日[土]

時間=13:00～14:30(参加無料/申込不要)

集合場所=東北芸術工科大学 本館7階ギャラリー「現代山形考」会場

登壇=

9月1日[土] 榎木野衣(美術批評家)

9月8日[土] 黒瀬陽平(美術批評家)

9月15日[土] 田中修二(大分大学教授)、深井聡一郎(彫刻家)

9月22日[土] 大場詩野子(油彩画修復家)

司会=三瀬夏之介、宮本晶朗

※展示室内でおこなうトークイベントのため会場に椅子はございません。事前にご了承ください。

2) ガイドツアー

100ものがたりキャンパスツアー

芸工大生の案内により大学敷地内に点在する100編の「ものがたり」をめぐるガイドツアーです。各日異なるテーマのもとに歩きます。出展作家やスペシャルゲストに出会えるかも。

実施日=会期中の日曜日(9月2日、9日、16日、23日)

時間=15:00～16:30(参加無料/申込不要)

集合場所=東北芸術工科大学 本館7階ギャラリー「現代山形考」会場

ガイド=100ものがたり調査班

3) トークセッション

100ものがたり座談会

出品作品への思い、制作の裏側、山形についてなど、参加アーティストたちによる熱い語りが続けられます。

実施日=会期中の日曜日(9月2日、9日、16日、23日)

時間=16:30～18:00(参加無料/申込不要)

会場=東北芸術工科大学 アトリ棟3階 コラボレーションゾーン

登壇＝

9月2日[日] 永岡大輔、水野健一郎ほか

9月9日[日] 深井聡一郎、吉賀伸、青山ひろゆき、金子朋樹ほか

9月16日[日] 金子富之、長沢明、市川寛也ほか

9月23日[日] 井戸博章、宮本晶朗、大山龍頭、アイハラケンジ、三瀬夏之介ほか

4) パフォーマンス

演劇公演「リンドバークたちの飛行」

1927年に大西洋横断飛行を成功させたチャールズ・リンドバーク。孤独な戦いは33時間にも及んだという。2018年、プレヒトの戯曲が移動式演劇として山形の芸術祭に飛来する。鑑賞者は俳優と共に展示室をめぐり、待ち受ける困難に立ち向かう。リンドバークが目指していたものは何だろう。その夢は、私たちの夢でもあるはずだ。

実施日＝9月21日[金]、22[土]、23日[日]、24日[月・祝]

時間＝17:00～18:00(参加無料／申込不要)

会場＝東北芸術工科大学 芸術実習棟 本館側入口 インキュベーションゾーン

企画＝石原葉

上演＝ゲッコーパレード

作＝ベルトルト・プレヒト

訳＝岩淵達治

演出＝黒田瑞仁、柴田彩芳、本間志穂、渡辺瑞帆(青年団)、市松(砂と水玉)、古賀彰吾(劇団ドクトベッバス)

出演＝河原舞、崎田ゆかり、山本瑛子

演奏＝高木祐香

衣装＝YUMIKA MORI

◎関連トーク「私たちは、どこで表現しているのか」

地方の芸術祭と、美術館やギャラリー、劇場との一番の違いはなんだろう。それは作品が単独のものとしてではなく、「ここ」と密接な関係を持つことではないだろうか。「リンドバークたちの飛行」の公演をするゲッコーパレードの演出家黒田瑞仁氏と、批評家佐々木敦氏をお呼びして、表現者にとっての「場所と時代」を考える。

実施日＝9月24日[月・祝]

時間＝13:00～14:30(参加無料／申込不要)

会場＝東北芸術工科大学 アトリエ棟 コラボレーションゾーン

登壇＝佐々木敦(批評家)、黒田瑞仁(演出家)

ファシリテーター＝石原葉

5) マルシェ

AGAIN-ST×L PACK.「彫刻のある喫茶店+山の上の陶器市」

日本各地から注目されている若手～中堅陶芸家、工芸コース陶芸専攻卒業生・在学生から厳選された作家を集めました。陶芸作品というもともと生活に寄り添うアートを通して豊かな暮らしを手に入れてみてはいかがでしょうか？ 開店と同時に完売が予想される作家も出店します。お買い物を楽しんだ後はコーヒーをどうぞ。

◎彫刻のある喫茶店

実施日＝会期中の土日(9月1日、2日、8日、9日、15日、16日、22日、23日)

時間＝10:00～17:00

会場＝東北芸術工科大学 芸術研究棟C ROOTS & technique

企画＝AGAIN-ST

監修＝L PACK.(小田桐奨、中嶋哲矢)

作品出品＝AGAIN-ST(雷井大裕、深井聡一郎、藤原彩人、保井智貴)、保田井智之、吉賀伸、根本裕子、高妻留美子、田久保静香、三浦彩希、佐藤悠生、学部生選抜作品(順不同)

◎山の上の陶器市

実施日＝9月1日[土]、2日[日]

時間＝10:00～17:00

会場＝東北芸術工科大学 グラウンド

出店者＝樽見浩、田村一、竹下鹿丸、武田千秋、うつわやみたす、山野辺彩、芳賀龍一、田川亜希、坂爪康太郎、ツタンカーメン堂、落合重智、中田雄一、根本裕子、矢萩誉大、堀江遼子、山増ちひろ、陶工房エレミタ、後関裕士、鈴木美雲、山崎つかさ、中村恵美、福井由、学部生選抜テント(順不同)

〈同時開催〉

「山形と芸工大展 ―地域とつくるアートとデザインの実践―」

会場＝東北芸術工科大学 本館1階ラウンジ

監修＝中山ダイスケ

「山形エクセレントデザイン展2018」

会場＝東北芸術工科大学 デザイン工学実習棟B 2階

主催＝山形デザインコンペティション実行委員会

山形交響楽団コンサート「山形ビエンナーレ・スペシャル金管八十奏」

実施日＝9月8日〔土〕

時間＝16:30～18:00

会場＝東北芸術工科大学 水上能舞台「伝統館」

出演＝山形交響楽団

共催＝公益社団法人山形交響楽協会

学外展示「幻成する狂気」

会期＝9月1日〔土〕～9月24日〔月・祝〕

会場＝蟹仙洞(山形県上山市矢来4-6-8)

時間＝12:00～16:30

出展作家＝長沢明、金子富之

主催＝東北妖怪文化研究センター

バスツアー「山形の100ものがたり探訪」

実施日＝9月22日〔土〕

時間＝10:30～18:00

定員＝30名(要申込)

参加費＝1,000円

集合場所＝東北芸術工科大学 芸術実習棟 本館側入口 インキュベーションゾーン

主催＝東北妖怪文化研究センター

同行＝市川寛也、金子富之、長沢明

申込方法＝件名を「バスツアー希望」と明記し、以下の内容をメールでお送りください。①参

加者氏名(複数名可)、②日中に連絡の取れる電話番号、③在住市町村名、④ご所属(任意)

送付先アドレス:ichikawa.hiroya@aga.tuad.ac.jp

※応募者多数の場合は抽選となります(受付〆切:9月17日)。※Eメールでの申し込みが難しい方は往復はがきにてお申し込みください(9月17日必着)。送付先:〒990-9530 山形市上桜田3-4-5 美術科・市川宛

プロジェクト参加メンバー

「100ものがたり調査班」(監修＝市川寛也)

池田菜菜、田村和之、富樫瑞紀、早坂月那、番匠朱、飯田美咲、渡邊美佳

「山のようなヤタイ祭り」

池田菜菜、市川寛也、追沼翼、大久保明香、大友李々花、熊田敏秀、こども芸大11期生のなかまたち(代表 山口結菜)、佐藤果南、佐藤恒平、佐藤朋子、佐藤成美、佐藤はな、佐藤美聖、佐原香織、澤田瞳菜子、城山萌萌、高瀬快、高野奈美、松村泰三、間瀬真梨子、森川優輝、若月匠、渡邊美佳

「東北画は可能か?チーム:山達隊」(代表＝富永和輝)

石原葉、富田菜摘、廣田百羽、高田侑実、末次佑、山中冴果、佐々木菜摘、榊原愛美、佐藤高彰、佐藤里奈、手代木伽友、滝口真里、本間慧、田中小春、相馬路子、井藤凜子、小松莉子、河内千嘉、青木みのり

「最初の家 The sphere community, Yamagata, Kamisakurada 2018」(監修＝永岡大輔)

池田美涼、中あやの、琢磨香織、井澤朱音、白川円香、佐々木菜摘、菅原桃佳、立木希、關越河、榊原愛美、福定緑、佐藤悠生、三浦彩希、菅野耕平、池田洸太

山のような100ものがたりハンドブック

発行日=平成30年9月1日

発行=東北芸術工科大学

山形県山形市上桜田3-4-5

電話:023-627-2000

www.tuad.ac.jp

プロデュース=宮本武典

アートディレクション=杉の下意匠室

編集=中島彩

「現代山形考」リサーチアシスタント=阿部麻衣子

印刷=田宮印刷株式会社

Printed in Japan 2018

©東北芸術工科大学



YAMAGATA
BIENNALE



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN